

十全同窓会会報 189

2025 / 1



目次 | CONTENTS

新年のご挨拶……………03	金沢から世界へ発信……………21	西医体・医学展……………46
令和6年能登半島地震……………04	金沢大学外科アライアンス (KASA)の始まり……………22	課外活動紹介……………48
就任挨拶……………07	病院紹介・教室だより……………24	学生コーナー……………49
受賞・学会報告等……………11	支部だより・クラス会……………28	「生と死」を考える……………50
追悼 臼井 溢 先生……………16	令和6年度白衣授与式……………38	選択臨床実習海外派遣報告会報告記……………52
第5回鈴木大拙—西田幾多郎記念 金沢大学国際賞授賞式および記念講演会……………20	十全歴史ひろば……………40	

「令和6年能登半島地震 災害救援募金」 最終のご報告

令和6年能登半島地震により被災されました十全同窓会会員ならびにご家族さまに、心からお見舞いを申し上げます。

十全同窓会は同窓会会報186号(2024年1月発行)、同窓生ホームページ、メーリングリストなど考えられる手段を総動員して、同窓生が病院長を務めておられる能登北部基幹病院への災害救援募金を同窓会員の皆さまにお願い申し上げました。

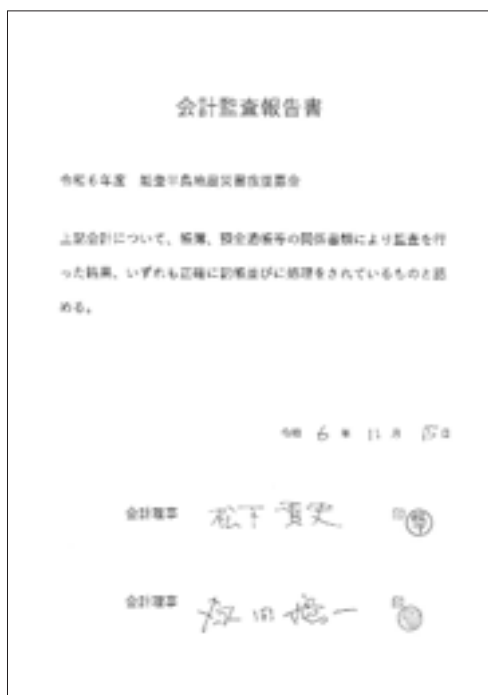
皆さまからお寄せいただいた浄財の用途について、最終のご報告を申し上げます。

各位からお寄せいただいた募金は、2024年3月5日、2024年10月30日の二度に分けて、市立輪島病院と珠州市総合病院に各々¥15,700,000.-を送金いたしました。募金の残金¥2,000.-は、同窓会からの郵便払込取扱票の通常払込料金加入者負担額¥135,052.-と合わせて、事務経費として支出しております。

十全同窓会会計理事の原田憲一、松下貴史両教授に会計監査をお願いしましたので添付します(図1)。

なお、11月1日以後に募金振込があった場合には、同窓会への寄附金として扱うことをご了承ください。

皆さまから賜りましたご協力に、心から感謝申し上げます。



2024年10月31日(木) 現在

募金総額 ¥ 31,402,000.-

件数 団体4件、個人910件

2024年11月

金沢大学医学部十全同窓会 会長 山本 健

図1

新年のご挨拶



十全同窓会会長

山本 健

おめでとうと言いつらかったお正月 (毎日新聞脳トレ川柳)

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、ご健勝に新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。年頭に当たり、ご挨拶を申し上げます。

旧年元日に発生した令和6年能登半島地震に被災された同窓会会員各位、ご家族、またそれに追い討ちをかけるような令和6年9月の能登半島豪雨に被災された皆さまに、心からお見舞いを申し上げます。

先日、災害産業保健の専門家の講演を聴く機会がありました。演者は、能登半島地震発生後早期に能登北部に入り、被災地の住民や自治体職員の健康維持の方策を提言された方です。ヒトや社会が突然の災害に直面したとき、警戒期→衝撃期→ハネムーン期→幻滅期→再適応期の順序で個人や社会の適応状態が向上していくことは以前から知られています(B.Raphael「災害の襲うとき」)。この中で、特に再適応期に次の災害に遭うと心が折れてしまうとのことで、能登半島豪雨はまさに再適応期を襲った災害でした。地震と豪雨の二重苦を体験された皆さまのご苦衷には、お慰める言葉もありません。

十全同窓会として、特に被害が大きかった能登北部の基幹病院長(何れも十全同窓会会員)にお力添えをするため、会員の皆さまに募金をお願いし、その最終報告を本号に掲載しております。同窓会員の皆さまからお寄せいただいた多額の募金に加えて、医学類学生の保護者と思われる方々からも募金が寄せられ、同窓会会長としてまことにありがたく、篤く御礼申し上げます。

足元の災害のみならず、海外でも大きな災害が起っています。スイス在住の知人から、以下の情報が寄せられました。この方は現地で日本人学校の校長を長く

務められた女性で、阪神淡路大震災の体験者でもあります。彼女曰く、

スイスに暮らし始めて一度だけ、バーゼルで震度2の地震がありました。

夜で寝転んでいたのが揺れはほんの少しだけ感じましたが、翌日は大騒ぎでした。私には(阪神淡路大震災に比べれば)何をそんなに！という感じでした。それに加えて鉄砲水。先月はスペインのパレンシアで大きな災害が起こりました。警報が遅すぎたということで政府が責められましたが、その時、娘が住んでいるマラガも一瞬で冠水したのです。その一週間後、再びマラガが大雨に見舞われ、その時には夜にスマホからけたたましい警報が出たそうで、心臓が止まる！と、気を静めるのが大変だったそうです。

スイスでは氷河が溶けて、それによる山崩れがゆっくりと始まっており、ひとつの村が全体移転と決まりました。スイスの場合は災害が少ないので、他の村に移転してもすべての費用を国と自治体が出すことになりました。

スイスは災害も戦争も、いちばん最後と言われています。それでも、氷河が溶けていることで危険区域での準備はしています。もう、世界で安全な国はないんじゃないでしょうか。

氷河が溶け出すのは温暖化の所為でしょうが、地球温暖化には無関心なアメリカ合衆国次期大統領、氷河が溶け出していることを知ってか知らずか。

本年が同窓会会員の皆さま、金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会にとって明るい一年になりますことを祈念し、また能登の災害復興が順調に進むことを期待して、新年のご挨拶といたします。

令和6年能登半島地震

能登半島地震～世の中にあまり知られていない話～

公立能登総合病院管理責任者、能登支部長 **吉村 光弘**

(昭和56年卒業)

2024年元日の夕方、能登半島を襲ったマグニチュード7.6の巨大地震から1年が経過しようとしています。この間の被災地の出来事で、世の中にあまり知られていないことがあります。

能登北部には珠洲、輪島、宇出津、穴水と各市町にいずれも200床未満の自治体病院が1つずつあり、輪島、珠洲などでは死傷者数が数百人規模となったため、その対応に追われました。市立輪島病院では、家屋の下敷きになって圧死した人達の遺体が霊安室に入りきれず、また玄関ホールには2日間で160人の被災者が殺到し、まるで戦場のような状態に陥ったようです。震度6強に見舞われた当院でも、天井裏のスプリンクラーの配管の一部が破断し、大量の水がもれて、床上7cmの浸水状態となりましたが、電子カルテや病棟、手術室などは正常に機能し、最小限の病院機能を維持でき、1月3日には地震後はじめてのお産を無事にすませることができました。

しかし、もっとも困ったのが貯水槽の破損で、内部の水の振動によってステンレスパネルの溶接部が離脱し、200トンの水すべてを失ってしまいました。また、市内全域で断水となり、このため給水車からの水はポリタンクや大型ビニール袋などに入れて保存し、自衛隊の1トンタ

	輪島市	珠洲市	穴水町	能登町	七尾市	志賀町	合計
死者 (うち関連死)	142 (40)	114 (17)	26 (6)	18 (6)	8 (3)	7 (5)	315 (87)
行方不明	3	-	-	-	-	-	3
重症	213	47	32	25	0	7	324
軽症	303	202	225	25	3	97	855

市立輪島病院 ↓ 穴水総合 ↓ 能登・志賀 ↓
 珠洲総合 ↓ 宇出津 ↓ 町立富来 ↓
 各市町にある1つの総合病院・警察が主に対応

ンクトレーラーを病院に置いてもらいました。大量の水を使う血液透析ができなくなりましたが、元日の深夜までには石川県透析連絡協議会を通して転院先が決まりました。しかし、移動の難しい数十人の透析患者の転院搬送は事務職員が丸2日かけて運転して、無事に河北以南の施設で透析を受けられるようになりました。道路事情が悪く転院先に到着するまで普段の2～3倍の時間がかかりましたが、遅くなくても早く出迎えてくれて職員も安堵したという話を聞き、本当に感謝しかありません。1月4日には通常の外来診療を再開しましたが、医師が診療できるまでには、自宅が被災しても出勤してくれた職員が外来の倒れた本棚や割れたガラスの後片付けをしたり、トイレ

に流す水を持参してくれたり、事務職員や看護師、技師、看護補助者など多職種が懸命に動き回って病院組織が運営できたということを知っているのでしょうか？

さて、当院には雨水を500トン貯める地下の大型貯水槽があり、これが無事でしたので施設管理の職員が院内配管を夜通しで応急修理して、水洗トイレを1月3日に復旧させることができました。それまでの1日半、患者さんはもちろん職員も簡易トイレで排泄しながら仕事を続けていましたので、どんどん汚物ゴミが増えて、あらためて水洗トイレの有り難さを痛感しました。また、水を98%再利用できるという節水型の手洗い装置が感染対策にたいへん重宝され、節水型の



シャワー室も患者さんにはとても好評でした。

七尾市内は1カ月以上も断水となりましたが、病院には全国の自治体等からの給水車が毎日70トンの水を届けてくれました。貯水槽に給水するために、事務職員らが寒い中を交代で外での作業をしていました。しかし、発災直後は血液検査や内視鏡、手術室のための水の確保などについて、災害対策会議中に医師と事務との間で厳しい言葉が交わされたこともあり、それぞれが自分たちの役割を果たそうと懸命に働く中での焦りを垣間見た瞬間でもありました。また、不確かな情報をもとにネットでは、「機能不全に陥るような公立病院にはこれ以上税金を投入すべきでない」とか、「患者を診もしないで加賀地域に送っているだけ」といった非難が書き込まれるなど、被災しながらも最善を尽くしている医療関係者の心を傷つけたり、怒りのやり場がないゆえの投稿にたいへん寂しい思いをしました。

ちなみに、1月末の看護部の調査では、看護師34名(約1割)が、自宅が被災したために避難所から通勤してくれていました。また、自宅通勤と答えた中でも、被災して遠くにアパートを借りた人が18名もいて、職員の使命感の強さに感謝しました。2月になってDPATが避難所で心のケアに対処しましたが、病院職員の中にも、圧死した遺体に対応した光景が蘇るといったPTSDや過労でうつ状態になりかけたなどの課題も明らかにな



りました。

さて、救急外来には地震直後から多数の患者さんが押し寄せてきました。1月15日までに合計659人の救急患者(1日平均44人)をトリアージしました。家の下敷きなどで瀕死の黒が5人、重症の赤が34人で、9割以上は軽症の外傷や脱水症などでしたが、避難所生活が困難な高齢者が多く、そのまま入院となったり、個人病院の建物が倒壊の恐れが出たために入院患者13人をまとめて受け入れしたりで、病院はあっという間に満床となりました。倒壊家屋の下敷きになった重症のクラッシュ症候群や多発骨折などの患者さんは自衛隊機で金沢や小松へ運ばれましたが、機内で死亡するケースもありました。また、患者情報の伝達がうまく届かず、深夜に準備して待っていたのに患者さんは別地域に運ばれていたり、紹介状よりもはるかに重症であったりと災害時の情報伝達の難しさを感じました。

当院は災害拠点病院ですので、通常診

療よりも被災患者の受け入れを優先する使命があるとのDMATの指示で、震災前から入院していて経過が安定している患者さんをできるだけ多く転院搬送してベッドを確保しました。地元の患者さんのご協力に感謝します。満床となった1月10日から計75人を加賀地域にDMAT隊の救急車で搬送していただきました。

DMATは1月2日にはすでに10隊ほどが到着し、当院には活動拠点本部が置かれたこともあり、1月4日には当院の駐車場はDMAT隊でいっぱいとなり、大・中会議室には常時70~80隊が、ピーク時には隊員は200名を超えました。施設入所者や入院患者の加賀地域等への避難には、DMATの救急車で県立中央病院に運び、そこでメディカルチェックを受けて搬送先を決めてもらいました。自治体もバスなどを使って被災者を二次避難先へ移動したことで(合計で約1万人)、過去の大きな震災に比べて当初の災害関連死を112人まで減らすことにつながったようです。しかし、介護施設等の中には入居者がいなくなるのは困るといって、DMATの助言にもかかわらず、施設内にぎゅうぎゅう詰めにしたところもあるようで、受け入れ先の確保も含め要援護者の避難は現実的にはなかなか難しい面があると感じました。

くわえて、DMATの拠点本部となった当院は予想外に多岐にわたる業務で事務職員は特に大変でした。簡易トイレ1000個以上、灯油ドラム缶10個の荷下ろしの手伝いや保管場所の確保などの



令和6年能登半島地震



他にも、細かな依頼や調整が多く、泥だらけになった階段や廊下の掃除までも職員が行いました。今更ながらDMATの拠点本部となる病院はとても大変だということを改めて認識しました。

一方、能登北部の避難所では廊下にも布団を敷いての雑魚寝状態など劣悪な環境が1カ月以上続きました。日本は道路などのハードの復旧が得意なのですが、慣れない被災者支援は手一杯で、契約業者からの段ボールベッドが届いたのも一番早い穴水の避難所でも3週間後でした。また、避難所の食事は暖かい炊き出しが提供できたのはごく一部で、多くは缶詰やカップ麺などで、どうしても塩分の多い保存食が多くなり(→災害高血圧に)、喉も渇くのですが、仮設トイレはとても清潔とは言えず、食べる量や水分を控え

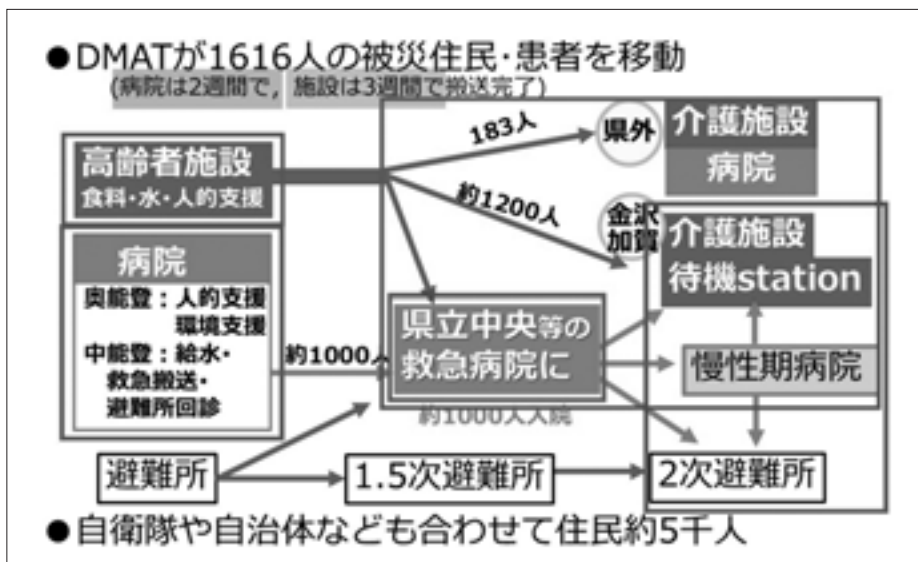
てしまいます。ある避難所の携帯トイレ2000個は800人の避難者で半日で底をつき、周囲を囲った中でゴミ袋に排泄して穴に埋めるところもありました。

現在、復興が遅れている原因は、なんといっても人手不足です。高齢化率が全国平均(29%)の約2倍の能登北部では、労働人口が極端に少なくなっています。また、4月の新学期が始まって小中学生の3~4割が戻らず、小さい子を持つ女性職員の約2割が退職したようで、輪島では市内の9つの小学校が来年には3つに統合される計画です。6月時点の北部の病院の外来患者の年齢構成を震災前と比べると、小さい子どもやその親と、遠方に避難した高齢者が著しく減っていました。つまり、被災地に残っているのは元気な中高年が中心で、外来患者数が

半分ほどに減ったままとなっていると多く、震災を機に能登の人口減少が一挙に顕在化して、まるで10数年先の未来へワープしたかのような状況です。

陸の孤島となっている能登半島の場合は、観光資源や伝統産業の復興と同時に、生活には欠かせない雑貨店や美容室など中小の事業所の支援と同時に、仮設住宅に奪われた学校のグラウンドの代替地などの社会的インフラの整備を進めるなど、人々がそこで暮らしていきたいと思うような復興が求められています。

最後に、県内はじめ全国から多くの支援者が能登の復興のために尽力くださっていることに感謝するとともに、一日も早く安心して過ごせる日が来ることを願ってやみません。



就任挨拶



金森 肇 博士

(特別会員)

新しい総合的な感染症科学・臨床検査医学を展開・実践

この度、2024年7月1日付で感染症科学・臨床検査医学研究分野の教授を拝命いたしました。十全同窓会の皆さまにおかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

感染症科学・臨床検査医学分野は、内

金沢大学医薬保健研究域医学系 感染症科学・臨床検査医学教授に就任

科系研究分野再々編により、金沢大学医学系に新設された分野です。1986年に臨床検査医学講座の創設後、初代・松原藤継名誉教授、二代目・橋本琢磨名誉教授、三代目・和田隆志教授・学長が主宰され、臨床検査医学の発展にご尽力されました。また、金沢大学附属病院に感染症科が新設され、臓器横断的に感染症の診療・管理を担当いたします。感染症を取り巻くさまざまな問題の解決に向けて、感染症科学・臨床検査医学分野ならびに附属病院感染症科、感染制御部、検査部は、異分野・各診療科と連携し、診療・教育・研究に取り組んでまいります。

私は、2004年に山形大学医学部を卒業後、2007年より東北大学感染制御・検査診断学教室に入局いたしました。以後、東北大学および関連施設で感染症領域の診療・教育・研究に研鑽を積んでまいりました。2011年の東日本大震災後は被災地の感染対策活動に取り組み、

2014年に米国ノースカロライナ大学感染症科に留学し、薬剤耐性菌のゲノム疫学や医療環境制御の研究を行ってまいりました。

コロナ・パンデミックにより、臨床現場における感染症学の教育の重要性はますます高くなってきており、基礎と臨床を融合したエビデンスに基づく感染症診療・感染対策を実践していくことが期待されております。大学での感染症学および臨床検査医学の教育の充実に努め、感染症の病態解析・疫学・診断・治療・予防・制御に関する総合的な対応能力を有する専門的人材の育成に取り組んでまいります。未知の感染症へ対応するため、新しい総合的な感染症科学・臨床検査医学を展開・実践し、診療・教育・研究に貢献してまいります。十全同窓会の皆さまからのご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

春の叙勲

瑞宝小綬章

太田 稔明
(昭和52年卒業)

旭日双光章

北川 浩文
(昭和56年卒業)

瑞宝双光章

伊藤 忠弘
(昭和43年卒業)

麻野井英次
(昭和50年卒業)

秋の叙勲

瑞宝中綬章

福原 毅
(昭和43年卒業)

森 厚文
(昭和43年卒業)

小島 靖彦
(昭和45年卒業)

旭日双光章

奥村 良二
(昭和48年卒業)

長柄 均
(昭和50年卒業)

松葉 明
(II会員)

就任挨拶



安彦 郁 博士

(特別会員)

カバーする領域は広く、
多くの仲間を育てたい

令和7年1月1日付で、金沢大学産科
婦人科学の教授を拝命しました安彦郁と
申します。十全同窓会の会員の皆さまに
ご挨拶させていただきます。

金沢大学医薬保健学域医学系・産科婦人科学教授に就任

私は平成12(2000)年に大阪大学医学部を卒業後、京都大学婦人科学産科学に入局し、京都大学および関係病院で研修の後、平成21(2009)年に博士課程に進みました。腫瘍免疫の研究に取り組み、平成25(2013)年に卵巣癌腹膜播種におけるPD-L1の発現の研究で学位を取得しました。当時は免疫チェックポイント阻害薬が初めて臨床応用された時期でした。Nivolumabの医師主導治験に関わって、自分がマウスモデルで見た腫瘍縮小が、不治と考えられていたプラチナ耐性再発卵巣癌の患者さんの中で実際に起こるのを目の当たりにして、基礎研究を行う意義を強く感じました。平成31(2019)年からは国立病院機構京都医療センターに赴任し、翌年より診療科長を務めました。専門は婦人科腫瘍で、特にロボット手術に重点的に取り組んでおります。

ロボット手術は婦人科では平成30

(2018)年に保険収載され、これから発展が見込まれる領域です。私は平成28(2016)年に先進医療・自費診療でロボット手術を開始し、若手術者育成に注力してまいりました。京都医療センターには新しい手術手技を学びたい産婦人科医が多く集まり、6年間で16名の新規ロボット術者が生まれ、各地で活躍しています。

産婦人科には生命の誕生をサポートする周産期・妊孕の分野もあり、やりがいのある診療科です。カバーする領域は広く、多くの仲間を育てる必要があります。今後はこれまでの経験を活かして学生や若手医師の育成に取り組んでいくとともに、さまざまな専門分野の先生方と協力しながら研究も積極的に行っていきたいと考えております。会員の先生方には何とぞご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域保健学系・
医療科学領域病態検査学講座教授に就任

林 研至 博士

(平成7年卒業)

次世代を担う優れた医師、
実践的な技術を持つ
臨床検査技師を育成

この度、令和6年10月1日付で、金沢大学医薬保健研究域保健学系・医療科学領域病態検査学講座の教授を拝命いたし

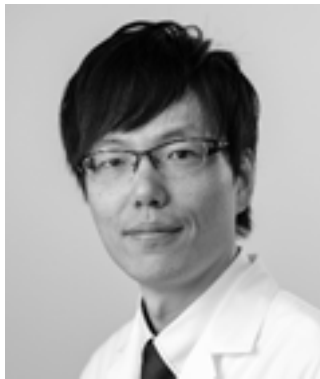
ました。私は平成7年に金沢大学を卒業後、馬淵宏教授が主宰される金沢大学第二内科に入局しました。卒後臨床研修を経て循環器内科を専門とすることに決め、石川県内の基幹病院でさまざまな循環器症例を担当し、多数の心血管カテーテル検査および治療に従事しました。大学院では先天性QT延長症候群の遺伝子解析と、脳細胞遺伝子学の東田陽博教授のもとで機能解析を行い学位を取得致しました。大学院卒業後、米国Vanderbilt大学で遺伝性不整脈の基礎研究に専念する機会もいただきました。

帰国後は助教として、臓器機能制御学の山岸正和教授のもとで、不整脈疾患を中心とした循環器診療、不整脈の基礎・臨床研究に携わりました。また、附属病院検査部・腎臓内科学教授の和田隆志先生のもとで、検査部の診療、教育、研究

にも携わりました。

令和2年に循環器内科学の高村雅之教授のおすすめとご尽力により保健学系の准教授に就任し、そしてこの度、数多くの先生方のご指導とご支援を賜り、教授に就任しました。

今後も臨床医として患者さんが納得される循環器診療を心がけ、遺伝情報を考慮した予防医療、個別化医療を目指します。学類教育では、次世代を担う優れた医師、現場で求められる実践的な技術を持つ臨床検査技師を育成します。大学院教育では、医学・生命科学研究者、高度先端医療人の育成を目指し、学生と一緒に世界水準の研究に取り組んでまいります。金沢大学十全同窓会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



野村 章洋 博士

(平成18年卒業)

デジタル医療とデジタロミクスの発展を目指して

このたび、2024年10月1日付で金沢大学融合研究域融合科学系の教授を拝命

金沢大学融合研究域融合科学系教授に就任

いたしました。私は2006年に金沢大学医学部を卒業後、東京の聖路加国際病院での内科研修、そして福岡の小倉記念病院での循環器専門研修を経て、2013年より金沢大学大学院に進学しました。大学院では循環器遺伝学研究に従事し、2014年から米国マサチューセッツ総合病院のKathiresan研究室に2年3カ月留学しました。同研究室では心疾患関連遺伝子の研究を行い、特にCETP遺伝子研究では、LDL-Cの低下を介することが同遺伝子蛋白切断型変異保因者の心血管疾患に対する保護効果の主因であることを国際共同研究で実証しました。帰国後、当時の米国大統領オバマ氏が提唱した「Precision Medicine Initiative」にヒントを得てデジタル医療研究への転換を決意しました。以後はデジタル療法

(DTx)開発から始まり、人工知能/機械学習、ウェアラブルデバイス、ビッグデータ解析などの分野へと研究領域を広げました。そのような中で2021年に金沢大学に新しく設立された融合研究域は、VUCA時代に対応する文理医融合による未来知の創造を目指す点で私の研究分野と相性が良く、2022年より同学域の准教授として赴任をいたしました。現在は、ゲノムとデジタルを融合させた「デジタロミクス(Digitalomics)」という新たな研究分野を確立し、その発展に取り組んでいます。この度の教授就任を新たなスタートとして、研究分野のさらなる発展に邁進していく所存です。今後とも同窓の先生方のご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



岡本 一男 博士

(特別会員)

免疫系を軸とした組織微小環境の解明を目指して

令和6年4月1日付で、金沢大学がん進展制御研究所免疫環境ダイナミクス研究分野の教授に着任致しました。金沢大学十全同窓会の先生方に謹んでご挨拶を

金沢大学がん進展制御研究所免疫環境ダイナミクス研究分野教授に就任

申し上げます。

私は京都大学理学部を卒業後、同大学院生命科学研究所に進学し、細胞死受容体Fasの発見者である米原伸先生の下で、成人T細胞白血病の発症機構に関する研究に従事いたしました。学位取得後は、当時東京医科歯科大学にて独立したばかりの若き教授であった高柳広先生の研究室の門を叩き、骨と免疫系の新規分野融合領域・骨免疫学の研究に携わりました。その後、高柳先生が東京大学大学院医学系研究科免疫学教授へのご異動に伴い、私も助教として移籍し、さらに骨免疫学寄附講座の特任准教授を経て、17年という長きにわたり高柳先生の下で研究を続けてまいりました。この間、自己免疫応答に関わるヘルパーT細胞の分化機構、関節リウマチや多発性硬化症などの自己免疫疾患の病態機構のほか、炎症性骨形

成や骨髄における造血微小環境、がん骨転移の病態誘導機構などさまざまな疾患の骨と免疫系の相互関連を見出し、病態理解と創薬標的の同定に繋げてまいりました。現在は、これまでの実績を基盤として、免疫系を軸とした異種細胞間ネットワークの観点から、がん・炎症病態に潜む組織微小環境の解明に取り組み、疾患の予防・治療に向けた医療技術開発に繋げることを目指しています。骨を扱う研究も強みとしておりますため、骨・骨髄を侵す腫瘍の微小環境に着眼したがん研究にも取り組んでおります。自然科学に対する知的好奇心とチャレンジ精神を胸に、国内外に発信できるような質の高いサイエンスを築き上げ、医学・医療に貢献できるよう一層精進してまいりたく存じます。今後ともご指導ご鞭撻の程かとぞよろしくお願い申し上げます。

就任挨拶



堀江 真史 博士

(特別会員)

新たな架け橋として、
両大学の相互発展に貢献

令和6年11月1日付で、神戸大学大学院医学系研究科・病理学講座分子病理学分野(旧病理学分野)の教授を拝命しました。私は平成17年に東京大学医学部を卒業後、同大学呼吸器内科、米国留学を経て、大阪大学がんゲノム情報学教室に着任しました。当時はゲノム解析に明け暮れる日々でしたが、前田大地先生

神戸大学大学院医学系研究科・
病理学講座分子病理学分野教授に就任

(現・分子細胞病理学教授)から「病理の領域では新しい手法を取り入れないと世界と戦えない」とお声がけいただき、私自身も病理学研究という新しい領域に挑戦したいという思いが芽生え、令和4年から本学分子細胞病理学教室に赴任しました。

本学では、前田教授から病理学研究の基礎を学び、病理検体に関しては、附属病院病理部の池田博子先生、水口敬司技師の協力を得て、肺癌の分子病理学研究を飛躍的に進めることができました。その際、呼吸器内科の矢野聖二教授、呼吸器外科の松本勲教授から多大な協力を賜りました。また、間質性膀胱炎や髄膜腫など、新たな疾患領域の研究にも携わる貴重な機会をいただきました。さらに、病理解剖を経験し、各臨床科の先生方とのディスカッションを通じて、臓器を俯瞰的に捉える幅広い視野を持つことができ、私にとって大きな財産となっています。

なかでも、血管分子生理学の内藤尚道

教授からは、血管の領域にとどまらず、幅広い分野にわたるご指導を賜り、大型プロジェクトにおいて分担させていただく貴重な機会を頂戴しました。また、呼吸器内科の渡辺知志特任准教授とは、さまざまな呼吸器疾患を対象にオリジナリティの高い研究をご一緒させていただき、日々新たな発見に胸を躍らせながらエキサイティングな毎日を過ごすことができました。前田教授をはじめとする分子細胞病理学教室のスタッフの皆さま、そしてこれまでご指導いただいた諸先生方に、改めて深く感謝申し上げます。

神戸大学・分子病理学教室では、本学で学んだことや築いた人脈を最大限に活用し、臨床に還元する橋渡し研究、そして病理研究者の育成に取り組んでまいります。さらに、金沢大学と神戸大学の新たな架け橋として、両大学の相互発展に貢献してまいりたいと考えています。今後とも、変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて金沢大学医薬保健研究域医学系(心臓血管外科学分野)竹村博文教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(衛生学・公衆衛生学分野)中村裕之教授には令和7年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

つきましては左記の通り記念講演会を挙行することとなりましたのでご案内申し上げます

謹白

令和7年1月吉日

金沢大学医薬保健研究域医学系長 山本 靖彦

記

一、記念講演会

日時 令和7年3月13日(木) 午後3時から

場所 十全講堂

(記念講演会後の記念式は行いません)

事務担当 医薬保健系事務部総務課総務係

(電話番号) 076-265-2100

受賞

第18回頭頸部癌基礎研究会 優秀論文賞・功労賞受賞

近藤 悟

(平成11年度大学院修了)

金沢大学附属病院

耳鼻咽喉科頭頸部外科

この度、2024年6月19日にアクトシティ浜松で開催された第18回頭頸部癌基礎研究会において優秀論文賞ならびに功労賞を受賞しましたので謹んで報告申し上げます。

受賞論文は、上咽頭癌の発症にEpstein-Barrウイルス(EBV)の潜在膜タンパク質1(LMP1)に誘導されるDNAメチル化機序を解析したもので、BBA Mol Basis Disに採択されました。

本研究は、千葉大分子腫瘍学との3年を超える共同研究の成果であり、また、これまで通算3回本論文賞に応募したことの功績も認められ、同時に功労賞を受賞しました。

上咽頭癌は、EBVに関連する高転移性の悪性腫瘍であり、DNAメチル化などエピゲノム異常がその発症に重要な役割を果たしています。また、EBVの主要な癌遺伝子LMP1は、癌抑制遺伝子のDNAメチル化を誘導することで上咽頭癌発症に寄与することが報告されています。本研究では、上咽頭癌組織とメチロームデータを包括的に解析し、LMP1が誘導するメチル化遺伝子を抽出しその意義について検討しました。標的遺伝子を抽出すると、DERL3がLMP1発現により最も有意なメチル化遺伝子として特定されました。このDERL3によって細胞増殖能、遊走能、および浸潤能が有意に上昇することが分かり、上咽頭癌の発症に寄与することが示されました。

本研究においてご指導いただきました吉崎智一教授と耳鼻咽喉科頭頸部外科教室の先生方、千葉大学分子腫瘍学金田篤志教授と同教室の先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

令和6年度筑波大学 若手教員奨励賞受賞

堀 大介

(平成24年卒業)

筑波大学医学医療系

産業精神医学・宇宙医学グループ

私は平成30年に金沢大学大学院医薬保健学総合研究科を修了し、筑波大学に入職しました。産業医として勤務しながら、メンタルヘルス、労働安全衛生、予防医学に関する研究に従事しています。

この度、筑波大学若手教員奨励賞を受賞しましたので、謹んでご報告申し上げます。本賞は前年度に顕著な業績を上げ、筑波大学の研究力向上に貢献した若手教員に授与されるものです。

令和5年度の主な業績としては、新型コロナウイルスワクチン接種の優先対象の設定に関する疫学データの分析を行い、将来のパンデミック対策に資する知見を得ました(JMIR Public Health Surveill. 2023;9:e42143)。また、エムボックスのワクチン接種の受容率についても報告しました(Vaccine. 2023;41(27):3954-3959)。他にも、設計・分析に携わった公立小学校・中学校等教員勤務実態調査研究の報告書を作成したり、日本産産後ケア子育て・支援学会学術集会を事務局長として主催したりといった活動も行いました。多くの方々との協力しながら成果を形にできたことは、何物にも代えがたい経験であり、充実感を持って取り組むことができました。

今回の受賞は筑波大学の松崎一葉教授や東北大学の田淵貴大准教授をはじめ、学内外の多くの先生方のご支援の賜物です。特に、大学院時代からお世話になっている中村裕之教授ならびに公衆衛生学教室の皆さまには、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

金沢大学で培った学びが現在の活動の基盤となっていることを改めて実感しております。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第35回日本緑内障学会 優秀学術展示賞受賞

和田 康史

(平成26年度大学院修了)

金沢大学眼科協力研究員

この度、令和6年9月に開催された第35回日本緑内障学会において、「アルドステロン全身投与でのラット視神経乳頭部血管抵抗の解析」の演題にて優秀学術展示賞を受賞しましたので、謹んでご報告申し上げます。

緑内障は網膜神経節細胞死が生じることで進行性の視野欠損を起し、失明に至る疾患であり唯一エビデンスのある治療法は眼圧降下です。しかし十分な眼圧降下にもかかわらず視野障害が進行する症例が存在し眼圧以外の要因の可能性が報告されています。そして血管関連疾患である原発性アルドステロン症は多臓器に影響を及ぼす疾患で、眼疾患では緑内障との関連も近年報告されています。そしてアルドステロン持続投与ラットにて、眼圧は変化せずに網膜神経節細胞死が生じるとの報告があり、眼圧に依存しない緑内障との関連が想起されます。そこで我々はアルドステロン全身投与ラットモデルにて眼圧非依存性の網膜神経節細胞死の機序解明をすべく研究を行い、同モデルにおいて網膜神経節細胞数の減少、視神経乳頭血流速度の低下、血管径の狭小化、そして今回の研究発表内容である血管抵抗の増加を報告しました。本研究モデルでは眼組織血流と網膜神経節細胞数に有意な負の相関がみられたこと、血管壁硬化や高血管抵抗は血流低下や視神経乳頭出血等の緑内障進行リスクが増加すると考えられていることから、ラット動物モデルにおいても血管抵抗の評価は緑内障進行判定パラメータの一つとなる可能性を示しました。

最後に、今回の受賞にあたり、いつも研究のご指導をいただきます杉山和久名誉教授、東出朋巳准教授、金沢大学眼科教室の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

受賞

第33回日本脊椎
インストゥルメンテーション学会
最優秀口演賞受賞

石野 雄士

(平成30年卒業)

金沢大学整形外科

この度、令和6年9月に開催された第33回日本脊椎インストゥルメンテーション学会におきまして、「転移性脊椎腫瘍における腫瘍内flow voidのvascularity評価としての有用性についての検討」に対し、最優秀口演賞を頂戴いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。本研究は、転移性脊椎腫瘍手術における大量出血の重大な懸念に対し、腫瘍の血管新生を非侵襲的かつ定量的に評価する新たな指標として、単純MRIにおける腫瘍内flow void径の有用性を検討したものです。従来、血管性評価には侵襲的なデジタルサブトラクションアンギオグラフィー(DSA)がゴールドスタンダードとされています。本研究では、IFV径がDSAによる血管新生評価と高い相関を示し、さらに組織型に基づく評価と比較して優れた診断性能を有することを明らかにしました。134例の転移性脊椎腫瘍患者を対象に、単純MRIで測定されたIFV径が術中出血量およびDSAによる血管新生グレードと有意に関連することを示しました。ROC解析では、IFV直径2.5mm以上が高血管性腫瘍(DSAグレード3以上)を予測する上で高い感度(77.1%)と特異度(98.4%)を示しておりました。この結果は、標準的なMRIを用いた簡便かつ再現性の高い血管新生評価手法として、臨床現場における前手術計画の最適化や術中出血リスクの低減に寄与する可能性を示しています。特に、DSAのような高度な専門技術を要さずに導入できる点は、幅広い医療機関での実用化を後押しするものです。最後に、本研究を指導して下さった加藤先生、出村教授をはじめ、研究室の皆様へ深く感謝申し上げます。日頃よりご支援ご鞭撻を賜っております十全同窓会の皆様にも心より御礼申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

第35回日緑内障学会
一般講演座長賞受賞

宇田川さち子

(平成30年度大学院修了)

金沢大学附属病院眼科

この度、第12回日緑内障学会で一般演題 座長賞を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げます。受賞した演題は、「Preperimetric Glaucoma and Glaucoma Suspect Study 2年間での眼底進行」です。本研究は、日本緑内障学会のプロジェクト推進委員会で行われている多施設共同研究(国内16施設)のひとつです。本邦における緑内障極早期例と近視性乳頭を含む疑似緑内障例の臨床像の解明を目指し、前視野緑内障、緑内障疑いおよび早期緑内障の縦断的観察(5年間)により視野障害の発現進行とそれに関連する因子などを解析することを目的とした前向きコホート研究です。

緑内障は、網膜神経節細胞とその軸索である網膜神経線維が障害され、視野(見える範囲)が障害される疾患です。日本における中途失明原因の第1位であり、国内の緑内障疫学調査(Tajimi Study)では、40歳以上の日本人における緑内障の有病率は5.0%と報告されています。そのため、早期発見、早期治療、そして治療継続が非常に重要です。

今回は、緑内障疑い眼、眼底は正常であるが反対眼が緑内障もしくは前視野緑内障の眼、前視野緑内障眼について、2年間での眼底進行判定を検討しました。眼底進行の関連因子(多変量解析)は、前視野緑内障(ハザード比=7.97、 $p=0.024$)と乳頭出血(ハザード比=5.18、 $p=0.001$)でした。

今後は、ベースラインデータの確定、眼底進行、視野の進行解析など臨床に還元できるよう研究をさらに発展させてまいりたいと思います。研究のご指導を賜りました東出朋巳准教授、杉山和久名誉教授、新家眞先生(東京大学名誉教授)、ならびに共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。



ご寄附をいただきました。厚く御礼申し上げます

会員(匿名)

学会報告等

The 6th International Conference of D-Amino Acid Research (IDAR2024)

日時/令和6年8月21日(水)～24日(土) 場所/十全講堂・医学部記念館

2024年8月21日(水)～24日(土)、処暑の金沢にて、金沢大学宝町キャンパス十全講堂・医学部記念館(金沢市)を会場とし、和田隆志学長が会頭を務められたThe 6th International Conference of D-Amino Acid Research (IDAR2024)および第18回日本D-アミノ酸学会合同大会を開催いたしました。全ての人が安全に参加できるように基本的な感染予防策を講じる中で、全体参加者173名、海外からは7ヵ国より33名の参加がありました。新型コロナウイルス感染症の流行を乗り越え、再びの対面による国際会議に世界各国の専門家の皆さまをお迎えし、盛会のうちに大会を終えることができましたこと、さらに、本大会の開催にむけて、国内外の組織委員の方々をはじめ、多くの関係の皆さまから多大なるご支援とご指導を賜りましたことに対し、改めまして厚く御礼申し上げます。

本大会では、生物学、化学、医学、薬学、工学、農学といった多分野からD-アミノ酸の研究者が集い、最新の知見を語り合い、包括的に交流を深める機会となりました。代謝と輸送、分析法、D-アミノ酸に関する神経生理学、免疫学、がん生物学、腎臓学、内分泌学などのテーマに、新規診断法、食品や医薬品など臨床応用(診断と治療)の視点が加わり、活気あふれる議論が行われました。これまでの先人たちが築き上げてきた進歩に加えて、本大会ではさらに新たな展開や発展の議論ができ、とても有意義な会であったと思います。

白熱する議論の合間には、来日された多くの先生方に市内ツアーやシンポジウム・ディナーにご参加いただき、金沢の豊かな伝統と文化を体感していただきました。抜けるような晴天の下、しいのき迎賓館で行われたディナーにおいては、十全同窓会の同窓の皆さままで構成された

メディカルオーケストラ金沢による素晴らしい演奏のもと、学術的つながりを超えた会員同士の懇親が深められ、大変楽しいひとときとなりました。

結びにあたり、本大会にご司会、ご発表、ご参加いただいた多くの皆さま、そして協賛や展示などでご支援をいただいた企業の皆さま、医療機関の皆さま、運営に携わっていただいたスタッフの皆さまに対し、心より御礼を申し上げます。

(The 6th International Conference of D-Amino Acid Research (IDAR2024)事務局

金沢大学腎臓・リウマチ膠原病内科

岩田 恭宜、水島伊知郎(記)



学会報告等

第77回日本胸部外科学会定期学術集会

日時/令和6年11月1日(金)～4日(月) 場所/石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル金沢

令和6年11月1日より4日にかけて、第77回日本胸部外科学会定期学術集会を金沢で開催させていただきました。日本胸部外科学会(JATS)は当時の結核外科懇談会が発展し、ト部美代志金沢大学名誉教授を含む9名の合意により、昭和23(1948)年11月3日、東大内科講堂で第1回胸部外科研究会が開催されたことに源を発します。第10回をト部美代志教授、第40回を岩 喬教授が金沢で開催された後、37年ぶりに金沢で開催でき、海外招聘22名と3700名以上の参加者を得て、盛会裡に開催できましたことは私にとって至上の喜びであり、十全同窓会の関係各位に感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回の学術集会のテーマは Singularity -Escape from Inertia- としました。Singularity (特異点)とは、天文学においては、重力場が無限大になる「重力の特異点」であり、そこを特異点としてブラックホールを形成します。最近では「技術的特異点」のことを意味し、人工知能が人間の知性を超えることを言います。Inertiaとは「慣性」という意味で、例えばビジネスの世界で、老舗企業が何百年も操業できているのはいい意味でのInertiaをもっているからであり、悪い企業風土のInertiaがあると、それから脱却(Escape)できなくなります。日本胸部外科学会は歴史ある学会であり、心臓血管外科、呼吸器外科、食道外科の三領域の独自の発展により、胸部外科学会の存在意義を再認識する必要性に迫られています。Singularity、そこに込める気持ちは、今回の学術集会が、胸部外科学会の三分野の新たな展開、2026年の三分野独立会長制へ移行時としての特異点となれるようにとの思いからです。

今回は米国胸部外科学会(AATS)との共同で、僧帽弁手術に特化したAATS/JATS Mitral Conclave Workshopを11月1～2日にかけて同時開催しました。この会は2年毎にNew Yorkで開催され

ていて、その間隙に米国以外でWorkshopとして行われ、今回が2回目の日本での開催となります。全世界から著名な心臓外科医が一堂に会し、内容の濃い議論ができました。また同時に呼吸器外科領域のAATS/JATS International Thoracic Surgical Oncology Summitも初めて日本で開催され、多くの海外招聘と参加者があり、今後の定期的開催が決定しました。

地方での開催、しかも元日の能登半島地震の後ということもあり、参加者の減

少も危惧しましたが、多くの参加を得てほっとしております。今回大がかりな全員懇親会は行いませんでしたが、能登支援の気持ちを込めて、会議後のひととき、のどワイン、能登のお酒などを振る舞い、wine & cheeseという形で、ささやかなおもてなしとさせていただきます。

金沢の地で日本胸部外科学会定期学術集会を担当できましたこと、十全同窓会の各位に感謝申し上げます。学術集会開催のご報告とさせていただきます。

(竹村 博文：記)



第62回日本神経眼科学会総会

日時/令和6年11月29日(金)～30日(土) 会場/金沢市文化ホール

2024年11月29日(金)から11月30日(土)にかけて、第62回日本神経眼科学会総会を金沢市文化ホール(石川県)にて開催いたしました。

神経眼科学(Neuro-ophthalmology)は、Neuroscience(神経科学)を基盤とするあらゆる学問、すなわち神経内科学、脳神経外科学、精神科学、神経放射線学、神経耳科学、神経生理学、神経化学、神経解剖学などと眼科学を結びつける学際的領域の独立した学問大系とされています。眼の神経科学的情報としては、視覚、眼球運動、眼瞼運動、瞳孔運動、調節、輻湊および開散などがあり、眼は中枢神経系、自律神経系、および脳神経機能の豊かな表現器であり、日本神経眼科学会

はこうした神経眼科学的情報を適切に詳細に把握、分析し、診断、治療に利用する学問を育成発展させることを目的に設立されました(日本神経眼科学会HP)。

神経眼科は、未だ病態や治療法が十分に解明されていない疾患や症候群が多く残されている分野です。しかし近年、視神経脊髄炎におけるAQP4抗体の発見など、病態の解明が進展し、それに基づく新しい治療法が急速に発展している分野でもあります。本総会では、最先端の診断や治療についても活発に議論が行われました。特別講演には、神戸大学医学部眼科学教室の中村誠教授に、「Leber 遺伝性視神経症の謎と展望」という演題でご講演を賜りました。

本学会が北陸地方で開催されるのは初めてのことであり、最新的话题を議論するだけでなく、初心者から上級者まで楽しんで学べるよう工夫を凝らしました。会期前には講演内容を理解するための「事前セミナー」をオンデマンドで配信し、教育プログラムにも力を注ぎました。

大変多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。本学会で議論したことを活かし、今後も神経眼科領域の発展や神経眼科診療に貢献できるよう尽力してまいります。

(第62回日本神経眼科学会総会会長
大久保真司:記)



追悼 臼井 溢 先生 (昭和39年卒業)

臼井溢先生の逝去を悼み、お悔やみを申し上げます。

臼井先生から金沢大学全学また金沢大学医学系が賜ったお力添えは、枚挙に遑がありません。具体的なお力添えの内容は、学長始め直接臼井先生の警咳に触れられた皆さまが追悼文に述べておられる通りです。

一方、臼井先生と十全同窓会との直接的な接点は思いの外少なく、同窓会総会の場で表彰式が行われる「高安賞」(平成15年に臼井先生のお力添えで設置・医学系研究科博士課程において発表された学位論文が選考対象)授与式の中で、毎年臼井先生のご遺徳を受賞者と総会出席者に紹介するのが同窓会会長の役目になっておりました。

さらに令和6年1月に同窓会会員諸氏にご協力をお願いした「令和6年能登半島地震 災害救援募金」に際しては、臼井先生個人のお名前が高額の募金を頂戴しました。まことにありがたく、改めて感謝と御礼を申し上げます。



故 臼井溢先生

臼井先生のご遺徳を偲び、ご冥福をお祈り申し上げます。

十全同窓会会長 **山本 健** (昭和48年卒業)

臼井溢先生を偲んで

中村 信一 (昭和43年卒業)

十全同窓会名誉会長
元金沢大学長

謹んで臼井溢先生の逝去を悼み心からお悔やみ申し上げます。

私が臼井先生に初めてお声掛けいただいたのは、十全同窓会理事長の任に就いた平成15年、医学部に学術賞を設ける件であったかと記憶しています。先生は母校愛が極めて強くあられ、即断即決でございまして、金沢大学の発展に多大なるご尽力を賜りました。記憶鮮明な事象を幾つか申し上げさせていただきたく存

じます。

学長時代にはベトナムを始めとした東南アジアからの留学生の増加に外務省を紹介いただくなど、大学の国際化にご尽力いただき、また、男女共同参画にご支援いただきました。

学長退職後、学長時代に成し得なかった旧制第四高等学校に關係する建物を角間に設けたいとの思いをお話しさせていただきました際、先生は、即座に「何とかしましょう」と話され、現在、臼井ホール建設へと進展致しました。また、先生から、平成28年10月24日に、「昨日の日経新聞(奈良女子大学が岡潔賞を創設した記事)見ました？金沢大学も西田幾多郎・鈴木大拙賞を出したら？」とのお電話をいただき、小生も大いに賛同、今日の「鈴木大拙—西田幾多郎記念金沢大

学国際賞」創設に至りました。ここに改めて感謝御礼申し上げます。

先生のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。



臼井先生のお志に 心からの感謝を込めて

和田 隆志 (昭和63年卒業)

十全同窓会理事
金沢大学長

医療法人社団明徳会前理事長・学校法人十全青翔学園学園長、臼井溢先生が、去る令和6年10月7日に享年86で逝去されました。

金沢大学医学部を昭和39年に卒業された臼井先生は、昭和45年に本学大学院医学研究科を修了されました。その間、アメリカ・ニューヨーク市立病院にて臨床のご研鑽を積まれました。臨床でのアメリカご留学は現在にも増して大変であることは想像にかたくありません。その

先進的なご発想と素晴らしいご業績に改めまして深く感銘を受けております。大局を常にご覧になり、我々後輩に俯瞰的に適切なアドバイスをくださるその視点、視座、視野はそのころから培われてこられたと拝察いたします。これまでの臼井先生との面談では、いつも姿勢良く、足取り軽やかに笑顔でご指導をいただいたことがとても印象的です。金沢大学のあるべき将来像を大所高所から熱く語るお姿を拝見するたびに、本学への愛情あふれる思いを感じておりました。これまでのご厚情は本当にありがたく、改めて感謝を申し上げます。

哲学、東洋思想に造詣が深い先生には、鈴木大拙―西田幾多郎記念金沢大学国際賞の創設にも多大なるご尽力を賜りました。医学系学生への高安賞等の設立をはじめとするさまざまなご支援もいただい

ており、本学の研究・教育の推進と一層の国際貢献につながっております。現在、先生のご篤志による臼井ホールの計画も進んでおります。打ち合わせを兼ねて逝去の2週間前にもお目にかかりました。臼井ホールでの国際賞授賞式を大変楽しみにしていただだけに、このようなお別れの時を迎えて残念でなりません。

先生の訃報に接し、葬儀に先立ち浜松に参りました。これまでと同様に大変穏やかな表情をされていらっしゃいました。徳に満ちた臼井先生のお考え、歩みは、我々後進に深い感銘を与え続けております。我々は金沢大学を一層発展させるように努力を続けます。臼井先生のお志と長年のお力添えに感謝しつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

ヤッホー！ 臼井 溢 君

藤村 和昌 (昭和39年卒業)

藤村有松眼科医院

金沢大学医学部に入学して、課外活動に選んだのが金沢大学医学部山岳部でした。同級生で山岳部に入ったのは6名でしたが、その中に臼井君と私がいきました。夏の山岳部の行事は7月の剱沢での合宿と、その後の縦走でした。合宿では最初にザイルを使って下る練習をしました。ザイルで崖を下るのは下を見る必要がないので怖くなくて良かったです。岩場を登るのは、私は臆病者でありませんでした。臼井君はどうだったろうか？岩場で活躍したという話は聞いたことがないので、やはり私と同じだろう。

合宿の後は立山から槍ヶ岳までとか立山から後ろ立山を経て白馬までを幕営しながら歩きました。飯ごうで飯を炊いた時、始めちよろちよろ中ぱっぱを初めて



剱岳山頂にて、前列中央が臼井君
その後ろ白シャツが私

南アルプス駒ヶ岳か、前列左が臼井君
真ん中が私 いずれも昭和42年頃



知りました。標高2,000m以上の北アルプスを自炊しながら踏破するのは素晴らしい経験でした。上高地に無事下った時の喜びは筆舌に尽くしがたいものでした。

一緒に南アルプスへ出かけたこともありました。秋山で登山者が少なく、雄大な眺めを満喫しました。陽が傾き無人の山小屋に着きました。テントを張らずに小屋に泊まろうと決めました。無人なら無料で泊まれるだろう。ところが後から主が登って来て、素泊代を取られたことがありました。

医学部山岳部で活躍したのは20から22歳頃、体力的にもピークの頃だと思います。あれから60年以上、近年も君が南アルプスを歩いた記事を読んだことがありました。登山道に現れたりすがとても可愛かったそうです。だから君がお元気だと思っていました。とても寂しいことです。

君は母校の金沢大学のために長年にわたり、めざましい貢献をされました。我々には到底及ばないところです。君の高い志を称えます。

追悼 臼井 溢 先生 (昭和39年卒業)

臼井 溢 先生の 偉業を偲んで

岡井 高 (昭和52年卒業)

十全同窓会静岡支部長
岡井内科医院

先生は、医学の中核をなす母校金沢大学医学部の発展に多大な貢献をされてきました。世界規模の医学研究の推進や学生教育の充実に私財を投じ、学生実習用光学顕微鏡の提供に始まり、若手研究者のモチベーション向上にも寄与した高安賞の創設に至るまで、地域と世界に開かれた教育重視の研究大学金沢大学医学部の充実発展に多大な足跡を残されました。

また、地元の浜松市では、かば記念病院の開業を皮切りに、協立十全病院(現在の十全記念病院)、介護老人保健施設エーデルワイス等を開設し、さらには、医療従事者の教育機関として静岡医療科学専門学校を開校

されました。建学の精神に、1.教育とは心に火をつけることである、2.総合的人間力の豊かな医療人の養成、3.文武両道を掲げ、理学療法学科、作業療法学科、医学工学科、看護学科、助産学科、医学検査学、そして医学放射線学科の7学科を次々に開設され、静岡県医療の底支えにもご尽力されました。また、一流の教育を実践すべく、学科長には医学専門教育に実績のある浜松医科大学名誉教授をお招きし、本物の医療技術と精神を備えた医療人材の育成にご尽力されました。

このように、生命の誕生現場で培われた医療の原点から出発され、医療・介護・福祉の分野で多大な実績を残された臼井溢先生の御霊に心より感謝申し上げます。また、学問・教育の発展に惜しみなく貢献された先生の崇高な志を受け継ぎ、私たち静岡支部会員一同、先生のご遺志に従い一生を通じて学びを続け、金沢大学医学部同窓生として医学・医療の発展に寄与したいと考えています。どうか安らかにお休みください。



令和5年9月、笹俊成教授をお迎えしてオークラクトシティホテル浜松にて開催された十全同窓会静岡支部総会

臼井 溢 先生を偲んで

絹谷 清剛 (昭和61年卒業)

十全同窓会理事長
金沢大学副学長

臼井溢先生逝去の報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。

臼井先生からいただいた本学への想いは、私が申し上げるまでもなく、非常に大きなものでした。学術研究振興、若手研究者育成に貢献することを目的に、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者を表彰する高安賞を、平成15年に創設していただき、令和5年に創設20周年を迎えました。受賞者の多くはその後にも研究者として活躍しています。若手支援はこれに限らず、医学類、医薬保健学総合研究科、先進予防学研究科で学ぶ学生たちが海外における諸活動や国内で医学

研究を進める際の研究活動促進のために、平成28年に金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金を設立してくださいました。このような医学者・研究者教育のためのみならず、金沢大学の前身である第四高等中学校に学んだ鈴木大拙、西田幾多郎両氏を冠した鈴木大拙—西田幾多郎記念金沢大学国際賞を平成29年に創設されました。哲学、思想、宗教の分野で国際的業績を挙げた研究者を顕彰し、さらには次世代の若者を育て、学術研究の発展を願うものです。先生はこれらの大学の国際化、学術向上へのご支援に加え、ダイバーシティ研究環境形成に貢献した教職員等及び優れた女性研究者を顕彰する金沢大学ダイバーシティ顕彰へもご厚志を提供していただきました。先生は、令和4年には同顕彰のかいのきダイバーシティ推進賞緑蔭賞を受賞されました。

数年前に、上記の受賞者に関わる先生へのご報告が、かなり長い期間にわたっ

て不十分であることが判明しました。私が十全同窓会報編集委員長の用務を務めていた時代のことです。先生の本学へのご厚志を踏みにじるにも等しい愚行であると感じましたが、改善をご説明させていただくことで、寛大なお心でご容赦いただきました。当時私個人宛に、先生および先生のご施設の活動をまとめた資料を送っていただきました。先生の想いの大きさを紙面から読み取ることができ、先生のお心を再認識したことを記憶しています。

臼井先生の本学への想い、さらには母校愛を越えた普遍的な愛情の意味をお教えいただきました。金沢大学に関係する一員として誇らしく感じます。先生のご冥福をお祈り申し上げると共に、先生の御意志を受け継ぐことをお誓い申し上げます。

臼井溢先生を偲んで

堀 修 (特別会員)

金沢大学医薬保健研究域長・学域長

これまで金沢大学に多くのご支援をいただいた臼井溢先生が、去る令和6年10月7日に逝去されました。私は、医薬保健学総合研究科長、そして医薬保健研究域長として、臼井先生のご篤志で作られたプログラムの一部に関わらせていただきましたが、そのいずれからも、「金沢の伝統、文化を大切にしつつ、国際的な視野を持ち、社会課題を解決できる次代の医療人材・研究人材を育成してほしい」と言う、先生の熱いメッセージが伝わって参りました。

平成19年に開始された「臼井国際医学奨学金」では、インドシナ半島を中心とする地域から9名の留学生が金沢で研究活動に打ち込むことができました。そして、その成果は学術論文の形で発表され、金沢大学から博士(医学)の学位が授与されました。現在、彼らの多くは母国で大学講師、医師、薬剤師、研究者として活躍し、日本と母国を繋ぐ懸け橋になってくれています。また、平成28年からは「金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金」という形で金沢大学に籍を置く大学院生、学類生の海外派遣にもご支援いただきました。こちらにつきましても、多くの学生が国際学会等で発表する機会を得て、学生からは、学会でのディスカッションなどを通じて、達成感を得るとともに、研究へのモチベーションもさら

に高くなった、との声を聴いております。さらに令和元年には、ポーランドのヤギェオ大学やエストニアのタルトゥ大学との交流を開始することができました。今後、臼井先生からの奨学金をいただいた若い世代の医師・研究者が、世界の医学研究・教育の発展に貢献してくれるものと確信しております。

臼井先生におかれましては、このほかにも高安賞、鈴木大拙—西田幾多郎記念金沢大学国際賞等、多大なご支援を金沢大学にいただいております。私どもは、臼井先生のご篤志を肝に銘じ、日々精進してまいります。本当にありがとうございます。心より臼井溢先生のご冥福をお祈り申し上げます。

追悼

山本 靖彦 (平成4年卒業)

医学系長・医学類長

昭和39年に本学ご卒業の臼井溢先生の逝去を悼み、心よりご冥福をお祈り申し上げます。これまでの先生の本学医学部、医学系・医学類へのご厚情に深い感謝を捧げ、謹んで哀悼の意を表します。

これまで、臼井先生には、医学部生・医学類生が海外における諸活動や医学研究活動を行う際の奨学金としまして、あるいは、そのような活動を促進し成果を高めることを目的とした表彰制度としまして「金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金」を創設し、ご支援をいただい

ております。具体的には、平成28年度からになります。臨床実習や医学研究特設プログラム、基礎研究室配属などの正課授業における活動支援としての「海外医学活動推進奨学金」を計34名に、学生自らの研究成果の学会口頭発表に対する「研究推進奨学金」とし、計2名にご支援をいただきました。また、平成29年度からになります。在学中の優れた研究成果(論文、学会発表、受賞等)に対する表彰として「臼井医学研究賞」を創設し、計7名に授与いただきました。加えて、これまでに実績はございませんが、公募での海外派遣プログラムに不採択の場合に、私費で渡航する際の支援としまして「海外医学活動奨励奨学金」もご準備をいただいております。

先生の思いは、学生が海外で医学の活

動を行うためのきっかけをつくり、将来も臆することなく海外で活動ができたり、海外研究者と積極的に国際交流を図ることができるグローバル人材づくりにあると思います。同時に、学生の研究活動に対しましても、それを基礎として、将来、優れた研究者や医療人に成長することを期待されておりました。このような思いは、医学系・医学類としましても、今後も途絶えることのない重要な取り組みとして位置づけ、実践し進化させていきたいと思っております。

第5回鈴木大拙—西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会

日時／令和6年11月19日(火)

場所／ホテル日航金沢

令和6年11月19日、第5回鈴木大拙—西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会がホテル日航金沢3階孔雀の間において開催されました。

本賞は、第四高等学校に学んだ鈴木大拙と西田幾多郎にちなみ、本学医学部ご出身である臼井溢先生(昭和39年卒業、令和6年10月7日逝去、医療法人社団明徳会 十全記念病院 前理事・院長)のご篤志を原資として平成29年6月に創設されました。その趣旨は、哲学・思想・宗教を中心とする分野で国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰し、当該分野の研究の一層の進展を促すとともに、次代を担う若手研究者に対して大きな学問的刺激を与え、国際貢献と学術研究のさらなる発展に資することにあります。^{※1}

第5回受賞者にはジョン・C・マラルド(John C. Maraldo)北フロリダ大学名誉教授が選ばれました。

開式に先立ち、哲学と宗教に造詣が深かった臼井先生を偲び、黙祷が捧げられました。授賞式では、マラルド教授および金沢大学国際賞実行委員会の列席者の紹介の後、和田隆志学長(昭和63年卒

業)からご挨拶があり、マラルド教授に盾が贈呈されました。続いて、臼井岳先生(ご長男、現理事長・院長)からマラルド教授に副賞、輪島塗の記念品を手渡されました。これを受け、マラルド教授から、1971年の来日以来長きにわたり多くの方々の親切と協力があつたことへの謝辞が述べられ、選考委員の先生方の紹介と祝電の披露をもって閉式となりました。

続いて1時間半にわたり、マラルド教授の記念講演「西田哲学における可能性(The Promise of Nishida Philosophy)」がありました。マラルド教授は、「意識は自然界の産物である」とする典型的な科学の立場でもなく、「世界は意識の産物である」という哲学の立場でもない、「行為するのは個人だけでなく、世界でもある」という相互作用(reciprocity)を強調する西田哲学の特質を挙げられました。その上で、「西田にとって、行為するのは個人だけでなく世界でもあるということを思い出せば、もっともだと理解できます。世界は個人を通して行為するのです。動物の本能的な生活も世界の作用を表現し、世界を作り変えていきます」、「世界を自身に開く自覚は、人間だけでなく、世界を創造することができるすべての存在が有していま



す。これらの存在が世界を表現できる限りにおいて、彼ら歴史を創り出す存在なのです。すべての生き物を尊重しなければなりません」と述べられました。^{※2} この考えを今後さらに発展させてゆくと、西田哲学が環境破壊、生物多様性といった人類が直面している課題に応用される可能性のあることが提示されました。

記念講演会のあとは隣室で祝賀会が行われ、和やかな歓談のうちに全スケジュールが終了しました。今回は、在りし日の臼井先生のお写真を前に、マラルド教授ご夫妻、第3回受賞者のJames W. Heisig(ジェームズ・ウォレス・ハイジック)教授と第4回受賞者のリチャード・M・ジャフィ(Richard M. Jaffe)教授も参加され、とりわけ感慨深い式典となりました。

(横山 茂：記)



※1 金沢大学国際賞ホームページ



※2 ジョンC.マラルド 西田哲学における可能性(講演資料)



金沢から世界へ発信

金沢から早期膵がんの診断薬開発を目指して

金沢大学医薬保健研究域医学系
消化器内科学教授

山下 太郎

(平成7年卒業)

膵がんは全てのがんの中で最も悪性度の高いがんであり、90%以上が組織学的に膵管がんである。近年患者数の増加が著しく、本邦では年間約4万4千人が新規発症し、約3万8千人が死亡するが、患者数増加の理由は不明である。周囲臓器への浸潤や遠隔転移能力が極めて高いために多くが進行がんで見られ、全体の5年生存率は約8%程度である。運よく比較的早期に見られ手術が施行された患者さんにおいても、術後にリンパ節転移や遠隔転移を起こしやすい。進行期には化学療法が治療の主体となるが、抗がん剤感受性を予測するマーカーは存在しない。膵がん患者の生命予後延長には、1)根治切除が可能な早期膵がんを診断できるマーカー、2)転移、再発を予測するマーカー、3)抗がん剤感受性を予測できるマーカー、の開発が急務である。

金沢大学附属病院における膵がんの治療成績をみると、10mm未満で診断された患者さんの5年生存率は約85%程度であることから、膵がん患者の長期生存を得るためには、10mm未満のステージで診断する必要がある。現時点で実臨床において画像的に10mm未満の膵がんを診断するモダリティとしては超音波内視鏡が挙げられる。一方で、肝がんと異なり膵がんでは発がん高危険群の設定ができない。そのため、例えば膵が

んのリスク要因として糖尿病があるものの、本邦における糖尿病患者1千万人全例に定期的に侵襲的な超音波内視鏡を行うことは、医療資源的にも経済的にも不可能である。そこで、消化器内科学教室では、非侵襲的に多くの方にサーベイランスを行うことが可能な、早期膵がんバイオマーカーの開発研究を行っている。

これまでの消化器内科学教室の研究成果として、末梢血単核球の遺伝子発現パターンの解析から、膵がん患者と健康人では遺伝子発現の特徴が大きく異なることが判明している(Biochem Biophys Res Commun. 2010;400(1):7-15, Cancer Sci. 2019;110(4):1364-1388)。その正確な分子機序については未だ議論の余地はあるものの、生体内に膵がんが存在することで、免疫担当細胞に対し何らかの膵がん特異的なシグナル伝達が行われているのではないかと推察される。この研究成果から、金沢大学認定ベンチャー企業であるキュービクス社が膵がん診断キットであるパンレグザを開発し、2022年に薬事承認を受けてい

る。現在10mm未満の早期膵がんにおける診断能の研究を進めており、早期膵がん診断薬としての有用性評価を行っている。

また、教室では東京科学大学、アボットジャパン社との共同研究を行っており、膵がん診断に有用な可能性のある二つの血清マーカー(Laminin γ 2 monomer, EphA2 N terminal fragment : Cancer Res Commun. 2023 ;3(9):1862-1874)について研究を行っている。この二つのマーカーは通常の病院検査部で設置されている機器を使うことができること、薬価を低く抑えることができることから、Cost-Effectiveに全世界の患者さんに応用可能であり、世界展開されることを期待している。

消化器内科学教室では基礎的な研究成果を実臨床に還元し、難治がんである膵がんに苦しむ北陸、そして全世界の患者さんの予後に少しでも貢献できるよう、研究を進めている。これらの研究が膵がん患者の早期診断につながり膵がん治療に貢献できることを切に願う。



図 パンレグザキット

金沢大学外科アライアンス(KASA)の始まり

金沢大学医薬保健研究域医学系
心臓血管外科学教授

竹村 博文

(昭和60年卒業)

十全同窓会への寄稿ですので、少し金沢大学外科の歴史を紐解いてみたいと思います。

金沢大学外科の歴史は古く、1883年に木村孝蔵先生が、大阪大学から初代外科医長として赴任されたのに源を発します。1899年に外科を二部に分け、木村孝蔵先生が第一部長、下平用彩先生が第二部長になり、その後木村孝蔵先生が大阪大学教授として赴任されたのに合わせて、下平用彩先生が第一部長、後に耳鼻咽喉科教授になられる宮田篤郎先生が第二部長に任命されました。1923年、金沢医科専門学校の金沢医科大学への昇格のときに、それぞれ外科学第一、外科学第二教室となり、その後、第一外科、第二外科としてそれぞれ切磋琢磨し発展してきました。私が2015年、心肺病態制御学(旧第一外科)の教授として赴任した後、がん局所制御学(旧第二外科)の太田哲生

教授と話し合い、外科専攻医が外科専門医を取得するまでは、これまでの慣習であった卒業臨床研修終了後直ちにどちらかの医局、同門会に入局、入門することを廃止し、外科全体で育成するシステムに変更しました。その後、内科の臓器別再編終了が近づいたとき、外科の再編も加速的に進み、2~3年の時を経て、第一、第二外科という教授二人体制から、消化管外科、肝胆膵・移植外科、心臓血管外科、呼吸器外科の教授四人体制へと臓器別再編が完成しました。附属病院では他に乳腺外科、小児外科が診療科として存在し、大学院の講座としては消化管外科学/乳腺外科学、肝胆膵・移植外科学/小児外科学とし、心臓血管外科学、呼吸器外科学を合わせた4講座体制としました。さらに附属病院のハートセンターに小児心臓外科の特任教授を配置し、診療活動としては心臓血管外科の中で診療することとし、5教授体制としました。

そこでの課題は、それまでの数年間に旧第一外科にも旧第二外科にも所属していない、外科専攻医36名が存在し、彼ら彼女らの拠り所となる同門会的存在となる組織がなかったことです。新しい同

門会的組織をどのような形態で発足し、どのような人たちに入ってもらうか、幾重もの慎重な協議を経て誕生したのがKASAであります。

昨今、外科医が減少してきている、外科を目指す専攻医が減ってきている、日本外科学会新規入会者が少なくなっている状況に鑑み、この組織は若手外科医育成を主眼とし、同門会という形態より、外科研修センター的組織にしようと結論付けました。

KASA(KANazawa university Surgeons' Alliance、金沢大学外科アライアンス)の始まりです。KASAの命名も若手医師からのアイデアでした。結果的には人を助ける傘であり、KをCに読み替えば、Casa(イタリア語で家)となり、非常にいい響きと、意味合いの命名になったのではないかと喜んでいます。

最初のメンバーは、金沢大学外科専門研修プログラム研修施設群の勤務医とし、研修施設群の病院長(外科医)、部長などの指導医から外科専攻医までの医師としました。ご開業されている先生方、定年を過ぎられた先生方には最初は入会をお勧めせず、とにかく日々外科医育成業務



にあっている方という定義で始めました。(もちろん近い将来、金沢大学に
関係する外科医全ての先生方にご賛同いた
ただければ、この定義も変化していかな
ければなりません。)

活動としては、(1)外科医のリクルー
ト・育成を支援する。(2)会員の親睦を

図る。(3)年1回の総会・懇親会を開催す
る。(4)セミナー・研究会の情報を発信す
る。(5)年1回の活動報告を行う。(6)名
簿管理を行い、発行する。名簿の発行は
年1回とする。を事業内容としています。

このKASAの活動が、若き研修医、学
生に外科の魅力を伝え、多くの意志ある

外科医を育てることに繋がっていくので
あればうれしい限りですし、そうなれま
すように、十全同窓会の各位のご支援ご
鞭撻をお願いして、KASAの紹介とさせ
ていただきます。

どうぞKASAをよろしくお願いいた
します。

金沢大学外科学教室の歴史

外科発足

1883年 木村孝藏 初代外科医長
 1899年 外科を二部に分ける
 第一部長 木村孝藏 第二部長 下平用彰
 1902年 木村孝藏 (⇒大阪大学教授)
 第一部長 下平用彰 第二部長 宮田兼部
 (⇒耳鼻咽喉科教授)
 1922年 第一部長 下平用彰 第二部長 泉 伍郎

外科学第一	外科学第二
下平用彰 1923年	泉 伍郎 (⇒岡山大学教授)
石川 昇 1925年	熊谷敬堂 謙 1928年
(東北大学教授⇒) 村 重次 1938年	(大阪大学教授⇒) 久留 勝 1941年
(大阪大学教授⇒) 久留 勝 1941年	卜部天代志 1954年
1959年	本庄一夫 (⇒京都大学教授)
1965年	水上哲次
岩 高 1973年	1974年 宮崎逸夫
渡辺洋宇 1991年	1997年 三輪昇一
渡辺 剛 2000年	2006年 大田哲生
↓ 竹村博文	↓ 清水浩一、橋本一、河津伸太郎
2015年	石川裕史、伊藤隆、松本 勲
2020年	

金沢大学外科再編

消化器外科 榎本紀彦	肝臓科・移植外科 八木真太郎	心臓血管外科 竹村博文	呼吸器外科 松本 勲
小児外科 (酒井清輝)	乳腺外科 (寺川裕史)	小児心臓血管外科 (村田 剛)	

病院紹介

金沢赤十字病院

当院の歩み

当院は、大正14年に日本赤十字社石川支部産院として発足しました。その後、昭和28年に「金沢赤十字病院」と名称を改め、昭和43年に現在地である金沢市三馬に移転しました。金沢市南部および野々市市を中心に地域密着型の医療を提供しつつ、全国に91ある赤十字病院の一つとして災害救護活動にも注力しています。

病院機能

入院機能においては、地域急性期機能と地域包括機能の2本柱で地域を支える体制としています。病棟構成は急性期3病棟が前者を担い、地域包括ケア2病棟、回復期リハビリ病棟が後者を担います。さらに訪問看護ステーションを併設することで、入院から在宅復帰までのシームレスな医療も提供しています。また、「消化器病センター」「糖尿病・腎センター」「骨関節・脳血管リハビリテーションセンター」の3つの疾患センターではチーム医療を軸とした専門性の高い治療を実践しています。外来機能においては紹介

受診重点医療機関として、紹介患者を優先しつつ、救急患者、専門医療を重点的に提供しています。

能登半島地震および 奥能登豪雨への対応

令和6年1月1日に発生した能登半島地震では被災地域の赤十字病院として、約100名の能登からの入院患者、透析患者を受け入れつつ、DMAT、救護班、心のケア班の派遣を継続的に行いました。同年9月の奥能登豪雨災害においても、救護班、こころのケア班を派遣し、被災住民のサポートならびに自立支援を行いました。

病院理念

「思いやりの心」をもって「信頼される医療」を提供し、「地域に貢献」することを理念としています。地域住民や医療介護関係者、職員間の相互理解と支援を大切にし、職員が誇りとやりがいを感じられる病院を目指しています。

地域の高齢化への対応

地域の高齢化が進み、認知症や要介護状態の高齢者、独居世帯が増加しています。当院は地域包括ケアシステムのハブ、最後の砦病院として地域の高齢者を受け入れ、『元いた場所にお元気で』お帰りいただけるよう、多くの多職種チームが活動しています。

当院の目指す方向性

職員が「優しい・楽しい」と感じられる職場環境を整えることが、質の高い医療提供につながると信じています。「職員交流委員会」や「人材育成委員会」などを設置し、職員の幸せを大切にすり組みを進めています。また、地域の皆さまとともに課題を共有し、変革の波に対応しながら持続可能な医療の提供を目指します。

令和7年7月に開院100周年を迎えます。今後も地域に根差した医療と赤十字精神を携え、地域とともに歩み続けてまいります。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(病院長 寺崎 修一：記)

概要

金沢赤十字病院	
所在地	石川県金沢市三馬2丁目251番地
病院長	寺崎 修一
病床数	一般病床 262床 (再掲) 回復期リハビリテーション病棟 43床 地域包括ケア病棟 80床
診療科	17

沿革

大正14年 7月	日本赤十字社石川支部産院として発足(下新町)
昭和7年 5月	金沢市下新町より同市殿町へ移転(現大手町)
昭和28年 4月	金沢赤十字病院と名称を変更
昭和43年10月	金沢市三馬町地276番地(現三馬2丁目251番地)に新築移転
平成9年 2月	地域災害医療センターに指定
平成23年 4月	石川県地域がん診療連携推進病院に指定
平成23年 9月	基幹型臨床研修病院に指定
令和5年 8月	紹介受診重点医療機関に認定
令和7年 7月	開院100周年を迎える

JA新潟厚生連 けいなん総合病院

ご挨拶

金沢駅から新幹線で1時間の上越妙高駅から車で10分余り、頸城平野南端の妙高市に当院は立地しております。ご紹介させていただく機会を与えていただきました十全同窓会に厚く御礼申し上げます。私は、平成8年に金沢大学を卒業し、当時の内科学第一教室に入局、専門は消化器内科・総合内科です。学位取得後に出身地の上越地方に戻り、令和2年に当院に入職、令和4年4月に当院13代目病院長を拝命いたしました。

当院の歩み

昭和13年5月に「保証責任頸南医療購買販売利用組合連合会頸南病院」としてその産声をあげました。当時は、病床数51床、診療科は内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科の5科だったようです。その後、昭和38年1月に「新潟県厚生農業協同組合連合会」いわゆる厚生連に合併しました。平成14年4月に現在の病院が竣工、一般病床170床での運営が始まりました。平成29年4月には、医療需要を踏まえて1病棟を閉鎖、一般病床120床になりました。令和6年の能

登半島地震では、当院も震度5強の揺れに襲われ、屋上の外壁が損壊するなどの建物被害を受けました。

当院の現状

けいなん病院は、急性期一般病床20床、地域包括ケア病床40床、障害者病床60床の小規模病院です。診療科は15科、常勤医は内科、整形外科、小児科、外科、歯科を含めて9名の少数での運営です。外来は、地域の急性期病院や北陸・首都圏の大学から多くの応援をいただいで維持しています。医療機能は、内視鏡センター、人工透析室、手術室、リハビリテーションセンター、訪問看護ステーション、在宅介護支援センターを設置、地域のニーズに応えるとともに、入院は、亜急性期から回復期、慢性期の高齢者救急・医療に力を入れています。地域社会と時代に選ばれる病院を目指し、経営理念を「働く人が輝くことによって、地域医療に貢献する」と定義いたしました。また5つのSから始まる言葉「Safety(安全・安心な医療)」「誠実」「親切」「信頼」「Smile(笑顔)」を職員の行動指針・価値観として制定し、日々の活動で浸透をはかっています。また、若手・中堅

を中心に、多職種横断的なCross-Functional Teamが活動しており、イベント開催や業務効率化、収支改善など経営課題の提案にも尽力してもらっています。

今後の課題

少子高齢化、人口減少社会、診療報酬改定などの外的要因を受けて、どの病院も厳しい経営が続いていると思います。当院は、職員の頑張りでも令和4年以降90%超の入院稼働率を維持、地元行政のご理解も深いことから、黒字経営ができております。しかし、今後は事業環境の変化により、経営が非常に厳しくなることが予想されることから、より一層の経営努力が必要と考えています。さらに、労働集約型産業である病院の人財確保については、今後困難を極めることが推測されます。これを踏まえて、上越医療圏では再編議論が進んでおり、持続可能な医療構築への取り組みが始まっています。上越地域でも、金沢大学関連の病院長をはじめ、金沢大学の医師が地域医療に貢献されています。今後とも十全同窓会の先生方のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(病院長 平野 正明：記)

概要

JA新潟厚生連けいなん総合病院
所在地 新潟県妙高市田町2丁目4番7号
病院長 平野 正明
病床数 120床(一般病床)
診療科 15

沿革

昭和13年5月 保証責任頸南医療購買販売利用組合連合会頸南病院として開設
昭和38年1月 新潟県厚生農業協同組合連合会に合併
昭和41年4月 救急病院に指定
平成14年4月 新病院竣工
平成15年4月 介護老人保健施設はねうまの里竣工
平成16年3月 臨床研修病院指定
平成29年4月 一般病床を170床から120床に変更
令和2年3月 リハビリテーションセンター開設
透析センター拡大増床
令和4年9月 内視鏡センター設置

教室だより

先鋭科学融合研究分野



はじめに

先鋭科学融合研究分野は、令和6年7月1日に新設された基礎系講座です。異分野融合の推進によって基礎医学研究の成果を疾患の病態解明や予防、そして新しい治療法開発などの応用研究に発展させることを目標としています。新しい研究分野ということもあり、まだ構成メンバーは少ないですが、気軽に情報交換できる風通しの良い研究室運営とメリハリのある明るい体制作りを目指しています。

研究

当分野では細胞内小器官(オルガネラ)の機能解析に取り組んでいます。膜で仕切られた独立構造体という従来のオルガネラ概念は大きく進化し、オルガネラは独立した空間を保ちながらも互いに物質・情報をやり取りして最大限のパフォーマンスを発揮していることがわかってきました。私たちはこれまでオルガネラのひとつである「小胞体」の機能解析を推進してきました。その過程でオルガネラ間コミュニケーションの起点となる様々な小胞体局在分子やシグナル応答系を発見してきました。これを足掛かりとして、小胞体を中心としたオルガネラ間の機能連携の仕組みを理解し、その全貌を解明することを目指しています。技術的には培養細胞および遺伝子改変マウスを用いて主に生化学的、分子細胞生物

学的解析を駆使しています。それに加えてイメージング解析やゲノム・エピゲノム編集技術、タンパク質の構造解析、in silico解析なども積極的に活用しています。

オルガネラ間連携の破綻が疾患とどのように関わるのか、明らかにすることも大きな目標のひとつです。実際にこれまで発見してきた小胞体局在分子を標的とした遺伝子改変マウスの解析を通じて、これら分子の機能不全が小胞体のみならず核やミトコンドリアなどの様々なオルガネラの異常を経て、癌や脂質代謝異常、老化、骨格形成不全などの疾患につながることを示す新たな知見も得ています。これは、私たちが発見してきた分子がオルガネラ間連携のキー分子であり、その機能異常が疾患発症にも直結することを示しており、疾患治療に新たな切り口を提供できると考えています。開設されたばかりの分野ですがこれらの予備データや技術を武器にして、多様な研究分野の専門家とともに新規の治療戦略や診断法の開発を実現するために日々活動しています。

教育

医学類、医薬科学類および大学院において講義・実習を担当させて頂く予定です。医薬科学類に関してはすでに基礎ローテーション実習の受入講座として参

画させて頂き、学類生への基礎研究指導もスタートしています。講義では不可視の分子や物質がどのようにして生体の制御や疾患と関わるのか、動画やイメージをうまく利用してわかりやすく伝えていきたいと思っています。また、教育における当研究分野の目標のひとつは優秀な基礎医学研究者および研究医の育成です。そのために基礎医学研究に興味がある様々な学類生および大学院生に門戸を開き、基礎研究の楽しさと大切さを理解してもらえるよう心掛けています。さらにmedical research training (MRT) プログラムの充実に尽力するとともに、これを有効に活用し、基礎研究に触れるきっかけを広く提供できる分野を目指しています。

おわりに

微力ではありますが研究領域を問わず多様な専門分野の先生方との融合研究をさらに推進することで、オルガネラ研究を臨床応用につなげるトランスレーショナルリサーチを実践してまいります。同時に若手研究者の育成にも積極的に取り組み、金沢大学全体の持続的な発展にも力を尽くす所存です。金沢大学十全同窓会の諸先生方におかれましては、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

スタッフ

教授 齋藤 敦
博士研究員 大村 翼世
技術補佐員 齋藤 愛

研究分野の沿革

先鋭科学融合研究分野は令和6年7月1日に設立され、広島大学医系科学研究科分子細胞情報学の准教授であった齋藤敦が初代教授に就任しました。設立されて約半年の研究分野ですが、多分野融合とトランスレーショナルリサーチの推進、基礎医学研究者の育成を大きな運営の柱として活発に活動しています。

腫瘍内科学

診療

当教室の診療部門は、本学附属病院がんセンターから分離し、令和5年9月に新設された腫瘍内科を中心に活動しています。関連診療科と緊密に連携し、臓器横断的に固形がんに対する薬物療法を実施しています。標準的な化学療法、放射線化学療法、分子標的治療、免疫チェックポイント阻害療法に加え、肺・乳・大腸がん等の周術期補助化学療法を消化管外科、乳腺外科や呼吸器外科と連携して担当させていただいています。また、当科では遺伝子診断に基づく個別化医療である「がんゲノム医療」を推進しています。令和元年より本学附属病院は「がんゲノム医療拠点病院」に指定され、がん遺伝子パネル検査を自施設内で実施可能となりました。当科が担当する「がんゲノム外来」では、標準治療がない希少がんや原発不明がん、標準治療を終えた固形がんを対象に、遺伝子診断に基づく治療法を検討していますが、パネル検査では治療に直結するケースに限られるため、新規薬剤の治療を積極的に行い、有望な治療薬を患者さんに迅速に提供できるよう努めています。

教育

腫瘍内科医はがんという病気に向き合う患者さんを総合的、全人的に診る内科医です。「腫瘍内科の役割、腫瘍内科医のやりがい」を学生の皆さんに広く知っ



ていただくために、さまざまなトピックに焦点を当てた講義を提供しています。実習中ががん薬物療法を実施されている患者さんを担当し、ベッドサイドでの診察や手技、病状説明に立ち会ってもらいます。当科が中心となって実施している「包括的がんゲノムプロファイル検査」では、遺伝性腫瘍が判明し、遺伝カウンセリングに立ち会える機会もあります。また、腫瘍内科はチーム医療の実践にも心がけており、外来化学療法センターなど現場に学生の皆さんと赴き、他職種のスタッフとの関わりや実際の状況を肌で感じてもらいます。以上のように腫瘍内科の魅力を学生の皆さんに届けるべく、我々も常に努力を重ねてまいります。

研究

がんの分子・生物学的基礎研究を基盤とし、理工学や薬学などの異分野研究者との協力を通じて、革新的な抗がん医薬の開発に取り組んでいます。その一例が、がんの標的分子を特異的に発現抑制する抗がんsiRNA医薬の開発です。核酸医薬の領域には種々の課題がありましたが、学際的な共同研究を通じてこれらを克服し、First in Humanの治療に繋げています。また、複数の標的分子を同時に抑制可能な革新的な抗がんマルチターゲット

型siRNA医薬の開発に着手しております。さらに、教室が以前より取り組んでおります、幅広いがん種で課題となっている薬剤耐性機序の解明や、KRAS変異がんに対する新しい治療法の開発を推進しています。さらには、CAR-T等の先進的な免疫細胞療法や、分子間相互作用を基盤とする低・中分子抗がん薬スクリーニング系の構築など、次世代治療法の開発に従事しています。医師と基礎研究者が一体となり、基礎研究で得られた知見を患者さんに迅速に還元するトランスレーショナルリサーチを展開し、がんを駆逐するための包括的アプローチを実践しています。

おわりに

多くのがん診療科の先生方と連携させていただき、がん患者さんやご家族の視点を持った総合的、全人的な診療を展開してまいります。さらに、がん研の一部門であることから、現状のがん治療の限界を突破すべく、臨床現場に還元できる開発研究を推進するとともに、臨床現場の課題を医学研究に反映するため、当科が異分野・基礎・臨床の先生方のハブとなれるよう鋭意努力してまいります。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(谷口 博昭：記)

スタッフ

教授 谷口 博昭
 講師 大坪公士郎、竹内 伸司
 助教 山下 要、西山 明宏、福田 康二、
 堂本 貴寛、小谷 浩、坂口 裕之
 大学院生 2名
 医員 1名
 事務補佐員 1名

研究分野の沿革

当教室は、1947年の結核研究所附属病院設立、時代背景に応じ1967年改組されたがん研究所附属病院が源流です。1983年腫瘍内科部門に澤武紀雄教授が赴任され、内視鏡・痔疾患の研究に励みました。2001年10月金沢大学附属病院に統合され、2007年矢野聖二教授の就任後は、がんセンターとして肺癌、痔癌を中心とした幅広い臓器の悪性腫瘍に関する診療、研究、教育に貢献しました。2023年9月には腫瘍内科に名称変更され、2024年8月に谷口博昭が就任し、現在に至っています。

支部だより

関東地区拡大支部

十全同窓会関東地区拡大支部合同総会は、会員の居住地と勤務先が都や県を越えることも多いため、神奈川、千葉、埼玉、茨城、そして東京を一括して開催しようという目的で始まったのであるが、記録を紐解くと、なんと、2019年が前回開催の最終年であった。その理由は、2020年から全国に蔓延したコロナ禍の中、不要不急の手術はもちろん、会合も自粛するよという国の方針により、本総会も、自粛期間に入り、年1回の開催を断念してきたわけである。

今年は開催するのか、できれば開催してほしいというお問い合わせやご意見やらを、この1、2年前からいただくようになり、コロナ感染症が5類に移行した昨年の春にはそろそろかなと思ってはいたが、首都圏のコロナ感染が毎夏にピークがあること、参加者の平均年齢がどちらかという感染リスクの高い高齢に傾いていることから、夏以外を考

か、、、飲食抜きの会合は寂しい限りだし、、、かといって、「参加したらコロナに感染した」ということになっては一大事であるし、、、と、延ばし延ばしして、2024年を迎えてしまった。2024年になってから首都圏はひっそりとした少数のコロナ感染数で春から夏に向かっていたので、世話人会の皆さまにお計らいいただき、今年は4年ぶりに開催する運びとなった。

しかし、2024年は元日の能登半島大地震があり、首都圏に住まいする会員は、皆、言葉もないくらい大きなショックを受けた。DMAT、JMAT、その他の諸々の救済活動部隊のメンバーとして能登半島に行かれた会員も多い。金沢で青春を謳歌した者は、一度は能登半島に足を延ばして、緑多い自然を満喫し、食の豊かさを満喫したはずだ。このような本年であることも開催のブースターとなって準備を始めた。

4年ぶりの開催ゆえ、呼びする講師の先生は、当然、金沢大学学長和田隆志先生と十全同窓会会長山本健先生と決定。すぐにご快諾をいただき、順調な滑り出しとなった。お盆過ぎでも首都圏のコロナ

感染者数にはもう留意する必要がなくなりほっとしていたら、お盆過ぎから日本列島を半縦断して迷走した台風10号のスピードがだんだん鈍り、8月31日には首都圏を直撃するかも？というニュースが流れ、今度は台風に翻弄され、当日の天候に気を揉むこととなった。

幸いなかな、すべてが杞憂となり、8月31日(第一土曜日)の午後5時前に、無事、金沢からお2人の先生が、定例会場である明治記念館にお着きになられ、支部拡大合同総会が始まった。満を持して和田隆志先生と、山本健先生をお招きしたのであるが、本年は39名の参加となった。2020年卒の若者の参加があったのがうれしい限り。

開会の挨拶を茨城県支部長諸岡信裕先生にお願いし、神奈川県支部長北村佳久先生には、乾杯のご発声をいただいた。

さっそく、山本健先生からご講演をいただく。タイトルは、歴史小話「良家の出でありながら最初の献体をした三輪照路について」。一同、静かに、金沢という土地柄、人柄に思いを馳せたはずだ。そして、献体について、その深い精神について、改めて、深い感慨を覚えた。山



本健先生から、近々に、十全同窓会会報に掲載されることをお聞きしたので、再度、先生のご講演を活字で再演していただく機会となり、楽しみにしている。金沢の歴史とか、文化という範疇を越えた、古代から培ってきた金沢人の心意気を学びたい。

山本健先生の次に、和田隆志先生に、「金沢大学未来ビジョン『志』—オール金沢大学で『未来知』による社会に貢献する—」と題した講演を拝聴した。和田隆志先生は金沢大学医学類腎臓・リウマチ膠原病内科学の教授であり、腎臓内科分野では全国的に超有名な教授であられ、我々にはなじみの先生ではあるが、金沢大学医学類だけでなく、すべての学部を把握して、発展させていく、旗振りをしていくお役目の学長となられて、どのような方向にまたどのような方針で金沢大学を牽引されておられるのかに息を凝らして聞き入った。能登半島地震発災で被

災者への思いを強くしている会員は、和田学長の能登半島地震も呑み込んでさらに大きく発展させていく構想に、聞き入ってしまったことだろう。マイナスに大きく振れたのなら今度は大きくプラスに振ろう、このエネルギーは単にひとつの学部の研究内容にとどまらず、学部横断的な、そして、学外横断的な橋渡しを可能とする大きな研究と発展し、そして成果が出てきてという具合に、発展している様相がプレゼンされた。人、知、社会の好循環をつくり出して持続可能な運営の実現へと、その発展性には目を見張るばかりであった。金沢大学は安泰だと、参加者は誰も安堵したことだろう。すばらしい講演を久しぶりに拝聴でき、心豊かで贅沢なひとときとなった。

お二人の先生の講演後は、懇親会の場となった。卒業年度順に、参加者お一人お一人から近況をご紹介いただいた。学長先生のご講演を拝聴して浮かんだアイ

デアを学長に披露される参加者もおられ、和気藹々と時間が過ぎ、閉会の辞を千葉県支部長生水真紀夫先生にお願いした。

来年8月の本会には、ぜひ多くの会員の参集をお願いしたい。

最後に、学長と一緒に過ごされた基金・学友支援室長松村典彦様、そして当日までの調整にご尽力いただいた学長秘書室上沼孝平様には大変お世話になったことを記す。

本会世話人会のメンバーを記載しておく。神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、そして東京の各支部長ないし副支部長と幹事からなる。神奈川県支部長は北村佳久先生、埼玉県支部長久慈一英先生、千葉県支部長生水真紀夫先生、茨城県支部長諸岡信裕先生、東京都支部長は内潟安子である。今回お世話になった幹事は井田雅祥先生、石川博士先生、林同文先生、三浦順之助先生であった。

(内潟 安子：記)

連絡先の変更・ご異動の際は、 金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

会員情報変更はこちら



ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



支部だより

福井県支部

令和6年8月25日、第74回十全同窓会福井県支部総会があわら市のグランディア芳泉において開催されました。

今年では本部からの3名に加え、金沢大学法経文学部同窓会福井支部長の村田治夫氏をお迎えし43名の参加者を数えました。新幹線の開通でアクセスがよくなったおかげもあったのでしょうか、ご多忙の中多くの先生方にお越しいただき感謝申し上げます。

総会の冒頭、昨年総会以降に逝去されました3名の先生に黙祷を捧げました。その後平井淳一福井県支部長が挨拶申し上げ、続いてご来賓の十全同窓会会長山本健先生からご挨拶を頂戴し、十全同窓会の近況をお聴きました。引き続き表祝に移り、傘寿祝いとして坂井地区の久保田紀彦先生、就任祝いとして市立敦賀病院病院事業管理者の野ツ保和夫先生、

福井県立病院院長の道傳研司先生、福井大学学術研究院腎臓病態内科学教授の遠山直志先生にお祝いを贈りました。報告事項として令和5年度会務報告、令和5年度福井県支部会員数と会費納入状況について担当幹事より報告がありました。

協議事項として令和5年度・十全同窓会福井県支部会計収支決算および特別会計報告の監査報告が行われました。引き続き令和6年度会務計画(案)、令和6年度・十全同窓会福井県支部会計収支予算(案)および特別会計予算(案)、十全同窓会福井県支部会費についてお諮りしました。今回は平井福井県支部長就任後初の総会となりましたが、支部長から支部会計の厳しい現状に鑑みて会費の値上げの提案があり、これを含めて承認されました。

十全同窓会福井県支部だよりについて、平野編集委員長から投稿規定、第35号発行計画につき発表がありました。

議事終了後に金沢大学学長の和田隆志先生から「金沢大学未来ビジョン『志』」オール金沢大学で『未来知』により社会に

貢献する一」と題する特別講演を頂戴しました。初めに年初の能登半島地震の状況と母校の対応についてお話がありました。次いで就任以来広い視野で世界の動きを捉え、大学人としての活動をどう展開するかについて動画も用いながらダイナミックに語っていただきました。学生たちと身近に語り合う一方で、未来に向けて高い志を掲げる壮大なビジョンに心を熱くされた方が多かったようです。

恒例の記念写真撮影後場所を変えて懇親会となりました。坂井地区を代表して久保田先生の開宴の挨拶・乾杯発声にてスタートし、先生方には旧交を温めていただく場となりました。この中で村田支部長のご挨拶もいただき、次期開催地区を代表して村北和広先生の挨拶、菅田敏明副支部長の中締めへと進んで会を閉じることができました。しばらく対面の会合が開かれなかったことを思うと、昨年に続きこのような席を設けることができたこと、多くの先生方にご参加いただきました。真にありがとうございました。

(昭和52年卒業 一二三宣秀：記)



三重支部

令和6年度十全同窓会三重支部会総会は、令和6年10月20日(日)に三重県津市の料亭「はま作」で行われました。本年度総会には8人の会員の先生がたが出席しました。三重支部では、支部長伊藤敏秋先生(昭和52年卒業)のもと、今回の総会も、和やかに進行していきました。現在の三重支部の会員数は21名です。

昨年の開催は4年ぶりでしたので、昨年に続き今年度も開催させていただくことができ、本当に感謝しております。

会計報告の後、伊藤敏秋先生より、令和6年度金沢大学医学部十全同窓会の報告がありました。12支部の支部長が出席し情報交換が行われたことをうかがい

ました。また元日早々能登で災害がありその後先日豪雨があったこと、早期の復興を願うことなどのお話がありました。その後、各先生がたの近況報告と、最近の各臨床現場でのお話をうかがうことができました。三重大学眼科教授の近藤峰生先生(平成3年卒業)からは、遺伝子補充療法に関するお話がありました。片目だけで5000万円もする治療には効果と金額の高さ両方で驚いてしまいました。そして地元で開業されている原田資先生(昭和46年卒業)からは、ご家族でベトナムへ旅行されたお話や、1000万円されたオーディオ設備で聞くクラシック音楽の素晴らしさを聞かせていただきました。また三重県立こころの医療センター副院長の中瀬玲子先生(昭和62年卒業)からは、精神科で使用する薬物であるクロザピンの臨床での効果等を教えていただき、早速活用させて

いただきたいと思います。先生方から直接お話をうかがえる機会は滅多にありませんので、さまざまな分野での研究や実臨床のお話がかがえ、大変勉強になりました。その後の懇談会では各先生がたの趣味のお話しなど多くのお話をうかがえてとても楽しく、勉強になりました。各先生がたのお話を聞いたことで、これからのよい励みとなりました。また来年、先生がたにお会いするまでに、一つでもよい臨床成果を出せるようこれから1年間、さらに精進しようと思いました。そして懇談会も和やかな雰囲気うちに終わり、閉会となりました。本当にあっという間の時間でした。また、来年の同窓会も楽しみにしています。今回参加できなかった先生がたも、ぜひ、次回のご出席をお待ちしています。

(黒川 義博：記)



後列左から：黒川義博(平成21年卒業)、大石晃嗣(昭和63年卒業)、近藤峰生(平成3年卒業)、春木祐司(平成17年卒業)
前列左から：中瀬玲子(昭和62年卒業)、伊藤敏秋(昭和52年卒業、支部長)、原田資(昭和46年卒業)、祖父江直久(昭和51年卒業)
(敬称略)

支部だより

埼玉支部

埼玉医科大学総合医療センターの中山光男先生の企画担当で令和6年10月26日(土)に川越駅近くで講演と懇親会の2部に会場を分けて開催しました。今回は、金沢から和田隆志学長と山本健会長においでいただきました。第1部は川越駅前の東上パールビルディング貸し会議室で開催とし、山本会長からは、「良家のお出でありがとうございます初の献体をした三輪照路について」のお話を伺いました。毎度のことながら、事実や証拠を併せて細かい説明をしていただけるので感心いたしました。時代は変わっても連綿と続く金沢の不思議な人の連関については驚かされ

ます。インパクトのある現在の様子を伝える写真などから毎回の準備のご苦労が伝わってきます。和田学長からは「金沢大学未来ビジョン『志』～オール金沢大学で『未来知』により社会に貢献する～」とのタイトルで現在から将来の夢に至る壮大な構想をわかりやすい説明で教えていただきました。金沢大学の総合力と和田学長をはじめとする全職員の英知を結集し、夢を実現できそうな大きな予算を獲得して、未来に進み始めていることが実感されました。医学部にあった古い建物や物品を文化財としたり、原子間力顕微鏡で分子の動きを可視化したり等、金沢から離れた我々にも希望を持たせてくれる素晴らしい内容でした。

懇親会の第2部は近くにある馴染みの割烹「さわや」で開催しました。新型コロナ感染症以降では初めてで、

物価高騰のところ、いつもお世話になっているしっかりした若女将も健在で板前が気の利いた特注の料理を出してくれました。途中で参加者の近況など自己紹介をしながら歓談してあっという間に時間が過ぎました。

参加者は学長随行者1名を含めて総勢17名でした。年々恒例の参加会員が減少傾向ですが、新規参加者や新人の飛び入り参加者もあり、大変にぎやかな会となりました。参加者を少しずつ若返らせるための工夫を続ける必要性が共有されました。来年は埼玉県立がんセンターの神田浩明先生に企画担当をお引き受けいただけることに決まり、無事閉会となりました。

(久慈 一英：記)



参加記念写真(敬称略)

左から平沢良明(令和6年卒業)、加藤直子(平成2年卒業)、久慈一英(平成2年卒業)、北野善郎(平成元年卒業)、松成一郎(昭和62年卒業)、石黒洋(平成3年卒業)、山本健(昭和48年卒業)、神田浩明(昭和63年卒業)、和田隆志(昭和63年卒業)、鈴木智成(平成6年卒業)、西村昌雄(昭和49年卒業)、川口修(平成5年卒業)、中山光男(昭和57年卒業)、金森太郎(平成12年卒業)、紫藤明美(昭和57年卒業)、市川聡裕(平成5年卒業)

岐阜支部

令和6年10月26日(土)に十全同窓会岐阜県支部総会が岐阜市長良川河畔の「都ホテル 岐阜長良川」で、開催されました。岐阜県支部総会は平成30年8月に開催され、その後、令和2年6月に当時の金沢大学医学部眼科学教室の杉山和久教授(現金沢大学名誉教授)をお招きして開催することとし、全ての準備も整い、会員の先生方にも連絡済みでしたが、「コロナ」の患者が急速に増加する時期にあたってしまい、諸般の事情からやむなく中止に至り、その後も「コロナ禍」となり、開催できずにいました。従って約6年ぶりの岐阜県支部総会開催になります。今回の十全同窓会岐阜県支部総会は金沢大学医学部を平成10年3月にご卒業された岐阜大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野の小川武則教授の教授就任のお祝いの会を兼ねて開催いたしました。

全国的に10月とは思えない気温の高さが続いていましたが、開催当日の岐阜

はすがすがしい秋晴れとなり、岐阜県支部会員14名の出席がありました。

私、大西(昭和51年卒業)の司会のもと、岐阜県支部総会を行い、十全同窓会岐阜県支部の現状ならびにこれまでの支部総会の開催状況などの報告を行いました。これまで支部総会への若い先生方の出席が少ない状況でしたが、今回は比較的若手の先生方にも多く出席いただきました。

いくつかの報告事項の後に岐阜大学の小川武則教授の教授就任のお祝いの会となりました。小川教授は平成10年に金沢大学医学部をご卒業後、令和2年7月に岐阜大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学分野の教授に就任されています。十全同窓会岐阜県支部として教授就任祝賀会を開催すべきと考えていましたが、「コロナ禍」との関係からなかなか開催のきっかけがつかめないでいましたが、小川教授と事前に連絡して開催の趣旨をご説明し、ご出席について快諾をいただきましたので今回祝賀会を兼ねた岐阜県支部総会となりました。そして今回の支部総会のメインイベントである小川武則教授のご講演を拝聴いたしました。臨床では「光免疫療法」を含めた最新の頭頸部癌

に対する治療法や基礎的研究の業績を拝聴して、出席者全員大変感銘を受けました。

その後の懇親会は、前支部長の米倉幸人先生(昭和39年卒業)のご挨拶ならびに乾杯のご発声で楽しく始まりました。食事をとりながら、出席者全員の自己紹介、学生時代の思い出や近況の報告がなされ、その中では学生時代によく行った金沢のお店の固有名詞がいくつか登場し、さらに小川武則教授が学生時代に「準硬式野球部」に所属されていたとの紹介があり、またロサンゼルス・ドジャースの大谷翔平選手の「ポストシーズン」の活躍がマスコミに多く取り上げられた時期でもあり、留学先が大リーグのチームのホームタウンであったことの紹介が数名の先生からあり、大いに盛り上がりました。初めて支部総会に出席した先生もみられましたが、身近に先輩、後輩の存在を知り、お互いの絆を深める機会になったものと思われます。出席者全員で記念撮影を行い、予定の時刻となり次回の再会を約して散会となりました。世代を超えた交流の場として十全同窓会がますます発展していくことを祈念して支部会報告とさせていただきます。

(大西 弘生：記)



出席者記念写真(敬称略)

前列右より渡辺幸夫(昭和56年卒業)、國枝克行(昭和53年卒業)、大西弘生(昭和51年卒業)、小川武則教授(平成10年卒業)、米倉幸人(昭和39年卒業)、徳永周二(昭和54年卒業)、井奈波良一(昭和55年卒業)

後列右より雪田洋介(平成17年卒業)、萩田光代(平成25年卒業)、萩田淳一郎(平成26年卒業)、二宮空暢(平成16年卒業)、谷口徹(昭和59年卒業)、高橋健(昭和57年卒業)、寺倉陽一(平成15年卒業)、横山和俊(昭和58年卒業)

支部だより

山形支部

令和6年11月9日(土)山形支部総会を開催しました。

今回は十全同窓会会長の山本健先生にはるばる山形までおいでいただきました。場所はかみのやま温泉の名月荘です。上山市は山形市の直ぐ南に位置し、歌人であり、精神科医でもあった斎藤茂吉の生まれたところでもあります。スキー場で有名な蔵王連峰の麓にあり、茂吉も「陸奥をふりわけざまに聳えたまふ 蔵王の山の雲の中に立つ」と詠んでいます。

9日の夕方、かみのやま温泉駅に山本会長をお迎えに行き、車で名月荘に向かいました。今回の出席者は石原融先生(昭和46年卒業)、私(森谷、昭和47年卒業)、山本会長(昭和48年卒業)、池田利史先生(昭和50年卒業)と卒業年度がとても近

い集まりとなりました。

はじめに山本会長が、明治初期に設立された金沢医学館の一期生9人の写真をスライドで見せながら、この写真がいつ、どこで、誰によって撮られたかを探ってくお話でした。現在の金沢の街並みと昔の住宅地図との比較で、明治6年、当時まだ少なかった写真師吉田好二が「吉田写真館」で撮影したものと結論したお話を興味深く聴かせていただきました。1期生9人のうち士族は7人、庶民が2人とのことでした。士族7人が刀をたばさんでいるのはわかりますが、庶民の2人も刀をさしているのはちょっと違和感がありました。刀の時代ではなくなっているのに意識としては侍の格好をすることがよいと思われたのでしょうか。でも、あの時代に庶民を入学させたというほうが画期的だったのかもしれない。現在の金沢大学医学部に繋がる北陸の地で最初の医学を志した9人に尊敬と親しみを感じました。ミニ講演が終わって料理を

いただきましたが、山形らしく「芋煮」が出てきて里芋のねっとりしたやわらかさと山形牛の旨味を味わいました。山本会長も満足されていたようです。

学年が近いそれぞれの学年の友人、知人について訊ね合い、和気あいあいと会話が弾みました。最近の卒業生の同窓会への加入についてお尋ねすると、どこの大学医学部も同じような傾向ですが加入率は低くなっていますとのこと。臨床研修がマッチングによって全国どこでも行けるようになり、北陸に縛られることがなくなったのも影響していそうですね。それでも金沢大学医学部が今後も発展して欲しいと年会費を払い、能登地震への寄附をする私達です。翌日同じ部屋で朝食をいただき、部屋の大きな一枚窓から蔵王の山々を望むことができました。山本会長、遠いところ、かみのやま温泉まで来ていただき大変ありがとうございました。

(森谷 直樹：記)



岡山・香川支部

令和6年度金沢大学十全同窓会 岡山・香川支部会が12月14日(土)、お料理こにしにおいて開催されました。

令和6年は正月から能登半島地震が発生し、なんとか復興が進んでいるさなか能登半島豪雨が発生、さらに最近も能登半島地震が再発生するなど大変な状況です。金沢大学医学部十全同窓会より金沢大学医学類救急災害分野教授(金沢大学附属病院副院長)岡島正樹先生を派遣していただき、能登半島の災害の状況および医療活動、復興についてのご講演を賜り、参加者一同能登の復興を心より祈念

いたしました。

今回の参加者は三好恵一先生(昭和45年卒業)、徳野眞之先生(昭和48年卒業)、市川智継先生(平成3年卒業)、浅海浩二(筆者、香川支部長、平成8年卒業)、岡島正樹先生(平成8年卒業)、高北久嗣先生(平成8年卒業)、杉本太郎先生(平成9年卒業)、高木徹先生(平成9年卒業)、小林正彦先生(平成10年卒業)、西川敏雄先生(平成11年卒業)、門田弘明先生(平成12年卒業)、梅原憲史先生(平成12年卒業)、杉山成史先生(岡山支部長、平成13年卒業)、徳毛誠樹先生(平成13年卒業)の14名でした。

高北久嗣先生は三重中央医療センターにご勤務ですが、岡島教授と私と同じ平成8年卒業で、わざわざ岡山まで駆けつけていただき、会を盛り上げていただき

ました。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山成史先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。あとから気がつきましたが、今回の参加者で岡山支部長の杉山先生が最年少でした。来年度こそは若手の先生方に声をかけて参加者を増やし金沢から遠く離れた岡山・香川での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。

(浅海 浩二：記)



クラス会

“四四の会”傘寿を迎えて…

(昭和44年卒業生・クラス会)

安保・学生闘争?で日本中が大混乱していた時代の昭和44(1969)年に卒業した我々、金沢大学医学部卒業生の同級会=“志士”でもあり、“獅子”でもあった、“四四の会”を、コロナ・パンデミック禍の明けのを待って、6年ぶりの今年、令和6(2024)年10月18日(金曜日)、母校の金沢(ホテル日航金沢)で開催しました。

「80歳；傘寿」を迎えた75人の同級生中、出席者は約1/3の24人!! 今や、すでに約1/3弱の21人の友人がご逝去されており、また欠席30人の大半から、“体調に訳アリ！残念無念ながら欠席”との通知をいただき、準備世話人一同(金沢近郊在住)、大変驚きました。いつしか我々も高齢となり、医師を職としているといえども皆、己の体調管理が厳しくなっているのだ!!と思知らされました。

会に先立つ黙祷では、今は亡き彼らとの学生時代の思い出・笑顔が浮かび、深く脳裏をえぐられる想いがしました。そして、以前からの示し合わせどおり、今回の同級会が最後となる!?との重い雰囲気包まれました。

しかし、宴が始まり、各人の「金大医学生時代の思い出話+現役医師時代の活躍の姿+傘寿を迎えての心境など」が順々に披露されていくにつれて…!?…皆の目が輝き始め、元気な掛け声、ついで爆笑が堰を切るように続き、…いつの間にか間違いなく、「往時の“坂の上の雲=立派な医師”を目指しながら、学び励まし合って過ごした60年前の学生時代=まさしく人生が輝き始めた青春時代」、に舞い戻った!?かのような、“熱くて無邪気?な高齢者集団の大宴会”に変貌しました。どのテーブルのどの顔も、かつての若き姿を思い浮かばせて、懐か

しく愛おしく、徐々に旧友に会えた喜びに溢れ、“笑い興奮と賑やか”を超えて「喧騒のルツボ集団」と化けました。

「間違いなく皆、もう八十を越えた“高齢者”ばかりなのに、なんと若々しい!!」、「だれもかれも、今、まさに“20代のまんまの気分”に酔っているんじゃないのか!」、「傘寿集団のどこに、こんなエネルギーがあったの?“信じられない…!”」気が付けば、皆が皆、脳内は若戻り、眼も口も笑えばなしで、…司会も何も…全く収拾が着かなくなりました。…!!

アツという間に予定時間をはるかにオーバーしていることを知って、二次会席の準備を伝えると、これまた従順な放牧の羊のように、ほぼ全員が移動しました。が、テーブルでの組み合わせが変わっただけで、再び、相手を代えての昔の思い出話や打ち明け話、医師現役時代の苦労話や武勇談、退職した現在の正直な心情の吐露、人生達観論など、ここでも時間を惜しむように歓談が続いていたようです…。

冷静に見て、皆、間違いなく20歳往時の「純情で愛おしい己の青春」を想起こし、卒後「現役医師として夢中で頑張り通してきた獅子奮迅の姿」を愛おしみ、今、これでよかったんだ、と「辿ってきた道をふり返っているのだ」、と感じま

した。

今、改めて集合写真を眺めてみますと、卒業してもう55年も経ている姿なのに!?…どの顔も生き生きとして、しっかりと青春の残り香を漂わせています。

“今回が最後!”と前々から“仮約束”されてきたようですが…“こんなに楽しく、一気に青春時代に若返りできる「魔法のように貴重な“四四の会”」を、どうして「今回で終わり!」とできようか?もったいない!「100歳をめざして、これからも4~5年毎に『四四の会』を開催し続けていこうではありませんか!」と、今回の世話人の一人として、強く思った次第です。4~5年後もまた元気な姿で会い、また若返り、「にこにこ😊100歳を目指して!」励まし合いましょ!!

(金沢近郊の幹事の皆さん、数回にわたり準備・打ち合わせ会にご出席くださりまして、ありがとうございました。さらに、いつもながら、古川氏の会計・庶務、記録、荻野氏の写真撮影にも感謝申し上げます。 富田 勝郎：記)

代表幹事：富田勝郎

幹事：荻野知己、奥田則彦、北中 勇、古川 亘、水野徳美、村山和夫、山崎軍治



参加者

卒業時75名のうち、出席者24名(+同伴夫人3名)、欠席者30名、物故者21名(名簿順)今高国夫、荻野知己、奥田則彦、川西徹郎、河端美則、岸田 繁、北中 勇、佐野 勉、佐野三枝子、正司政夫、立野勝彦、筑田孝司、富田勝郎、仲村洋一、野垣英逸、原田瑞也、文 正夫、古川 亘、堀口尚夫、水野徳美、三船順一郎、三好敏之、村山和夫、山崎軍治

平成2年卒業生 同窓会

昨年元日の能登半島地震と9月の豪雨災害で被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。また、能登半島の医療や介護、復旧・復興に携わっておられる全ての方々に、心より敬意を表します。

私ども金沢大学医学部平成2年卒の同期は123名おりましたが、2名が鬼籍に入り、現在、病と闘っている者も少なくありません。今回、6年ぶりとなる卒後3回目の同期会を2024年9月15日にホテル日航金沢で開催いたしました。乳腺外科医として活躍していた同期の矢形君の逝去を悼むとともに能登半島地震を見舞いたいという思いから、遠くは米国や

沖縄から、53名の仲間が駆けつけてくれました。

最初はいまいだっただ学生時代の記憶が時間の経過とともに鮮明となり、気が付けばあの頃にタイムスリップし、あつという間の3時間でした。BSTのグループで前夜祭と称して旧交を温めた人たちも少なからずいたようです。どことなく昔の面影を残しつつも老いを隠せない者、卒アルの写真そのままの風貌の者までいろいろでしたが、女性陣の若々しさが際立っておりました。マラソンやトライアスロン、登山にチャレンジし続ける者もおりますが、オーバートレーニングで体を痛めて満身創痍の者も少なくなく、何事もほどほどが大切というのが共通認識でした。

作家の道を歩んでいる者、一般病院で働きつつアカデミアとして活躍する者、医師不足が深刻な地方の病院で老体に鞭打って馬車馬の如く働く者、急性期

病院での診療で疲弊して療養型施設で英気を養っている者、クリニックの開設者としてさらに高みを目指して日々精進する者、国内屈指のセンター病院でその道の第一人者として身を削って活躍する者、特許を取得して大学で活躍する者、米国で研究者としてサイエンスを探索し続ける者、美容外科や再生医療の道で活躍する者、不妊治療に邁進する者など多士済々ですが、中には定年後の雇用先を案ずる者も少なからずおりました。いずれにせよ、皆の心の中に金沢大学卒というidentityが今も根付いていることをうれしく思いました。次回は2年後をめどに東京で開催する予定にしておりますので、一人でも多くの平成2年卒で集えることを願っております。

能登半島の日も早い復旧・復興と、十全同窓会員の皆さま方とご家族のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

(高村 博之：記)



令和6年度白衣授与式

十全同窓会より白衣を寄贈しました

令和6年度に臨床実習を開始する医学類4年生への臨床実習生(医学)認定証および白衣授与式が、令和6年10月24日(木)に十全講堂において行われました。臨床実習生(医学)認定は毎年臨床実習開始前に行われ、診断学実習など所定の学類専門科目である基礎医学・臨床医学基礎の授業科目(51科目)に加えて、昨年度から医師法改正により公的化された共用試験であるCBT(知識を問う。Computer Based Testing)およびPre-CC OSCE(技能を問う。Objective Structured Clinical Examination)に合格した113名が当日の授与の対象になりました。Pre-CC OSCEでは、現状、8つの課題(医療面接、全身の状態とバイタルサインの測定、頭頸部診察、胸部診察、腹部診察、神経診察、基本的臨床手技、救急)により、評価カテゴリー毎に評点を合計し、合否判定が行われるシステムとなっています。今年度の医学類4年生は、本試験において32名が基準未到達となり、かなり心配をしましたが、再試験前に医学教育研究センター教員が中心となり、シミュレーションセンターで集中的に熱い教育指導を行った成果が実り、再試験受験者は全員合格となりました。

10月24日(木)の認定証授与では、山本靖彦医学類長から学生ひとりひとりに認定証が手渡され、続いて同窓会・医学類関係者9名(山本健十全同窓会会長、河崎洋志医王保護者の会会長、堀修医薬保健学域長、吉崎智一病院長、谷口巧副病院長、岡島正樹副病院長、山下太郎副病院長、高村雅之副医学系長、安藤仁副医学系長)が手分けをして、左袖に英字の大学名が入った長袖白衣を、学生ひとりひとりに着せ掛けました。

山本靖彦医学類長の訓示、堀修医薬保健学域長および吉崎智一病院長の祝辞に続いて、山本健十全同窓会会長が祝辞を述べました。山本健会長の祝辞では、この白衣贈呈が十全同窓会OBのご寄付によって支えられていること、具体的には

昭和33(1958)年に本学医学科をご卒業になった三木^{みき}甫^{はじめ}先生から、「後輩の学生諸君ために使ってほしい」と十全同窓会に賜ったご寄附に拠っていることを紹介し、「この白衣を身につける度に、大先輩から諸君への熱い想いを胸に刻み、卒業後は十全同窓会正会員として、母校と後輩を支援してほしい」と祝意を贈りました。

以上の訓示、祝辞に対して、臨床実習生を代表して森岡武翔君が宣誓を述べ、授与式を終えました。

臨床実習生諸君の懸命な精進を願っています。

山本 健 記
山本 靖彦



白衣授与式を終えて

令和6年10月24日、基礎医学、臨床医学の試験や共用試験に合格した私たちは無事にこの日を迎えることができました。臨床実習生認定証を受け取り、ドクターコートを着せていただいたことで、いよいよ臨床実習で現場に立つのだという実感が湧き、身が引き締まる思いでした。ドクターコートを着せていただく際や祝辞の中で、先生方からたくさんの激励のお言葉をいただき、これから医療従事者としての第一歩を踏み出すのだということを再認識することができました。

私たちは入学以来、医学知識の習得を



目標に学習を進めてきました。講義・実習やその試験、レポート課題など振り返ると大変な道のりでしたが、先生方の丁寧なご指導や友人たちとの励ましあいにより何とか乗り越えることができました

しかし、実際に医師として医療チームの一員となるにはまだまだ知識も経験も足りていません。それらを身につけるためには、これからの臨床実習が重要になると思います。臨床実習を通して、困難なことにも志を共にする仲間と支えあって取り組み、毎日少しずつでも一人前の医師に近づけるように精進していく所存です。白衣授与式で先生方にいただいた祝辞の中で、「臨床実習に真剣に取り組むことで、教科書で学ぶよりも数倍多くのことを患者さんから学ばせていただける」ということが非常に印象に残っています。これまで講義室で学んできた知識を前提として、真摯にかつ積極的に臨床実習に取り組み、ひとりひとりの患者さんとしっかりと向き合うことで、患者さんや先輩医師、医療スタッフの方々から多くのことを学ばせていただきたいと



思っています。臨床実習は、医師に必要な技術や態度を学び、高い倫理観や使命感、生涯を通して学び続ける姿勢を身につけることができる非常に貴重な機会です。責任感を持って真剣に臨床実習に参加し、学ばせていただく患者さんへの尊敬と感謝の念を常に持ち、全力を尽くして患者さんや医学の発展のために学びを深め、実りある実習にしていきたいと思います。

最後になりましたが、白衣授与式を開催してくださった先生方や学務係の方々、その他関係者の皆様に医学類4年生を代表して心より御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。また、十全同窓会からドクターコートを贈呈していただき誠にありがとうございます。今後大切にさせていただきます。

(医学類4年 森岡 武翔：記)



Juzen FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば[11]

良家の出でありながら 最初の篤志病理解剖を 望んだ三輪照路

編集委員

山本 健

(昭和48年卒業)

はじめに

十全同窓会会報第173号(2019年9月発行)の表紙には「金澤醫學校解剖遺骸之碑」の写真が掲載され、先人の医学への貢献を称えている。同号の奥付に掲載されている「表紙の写真」には、「写真は本学医学類の前身である金澤醫學校の時代に建石された『金澤醫學校解剖遺骸之碑』である」と説明があり、同号46、47頁には本学河崎一夫名誉教授による碑文の紹介がなされている。

一方、解剖遺骸之碑の横に佇む、正面に「三輪照路之墓」と刻まれた小振りの(神道式の)墓碑については「良家の方で最初の献体をされた三輪照路氏の墓」との解説がなされているが、三輪照路氏についてご存知の会員は多くないと思われる。筆者は三輪照路氏の医学への貢献を調べる機会を得、さらに現在の十全同窓会会員に三輪照路氏の縁に繋がる方々を見いだしたので報告する。

前田家に仕えた三輪氏

前田家に仕えた三輪氏には二つの系統がある。一つは前田利家が尾張荒子城主であった時代からの家臣で、利家の信頼が厚く、「荒子衆」と呼ばれる。一方、利家が越前府中で召し抱えた「越前衆」は、渡邊彦左衛門がその元祖である。前田家2代前田利長の時代に、荒子衆三輪藤兵衛吉宗の二男が渡邊彦左衛門娘の婿養子として渡邊家に入り、渡邊彦右衛門を名乗った。この時点で、三輪家と渡邊家は親族として合体したことになる。また、藩主の前田利長から「渡邊」の姓を実方の「三輪」に戻すよう命じられ、以後越前渡邊系も「三輪」姓を名乗り、荒子衆三輪家と越前衆三輪家は、共に三輪一族として現在まで続いている。

三輪照路は、越前衆(渡邊系)三輪家の末裔であり、元祖渡邊彦左衛門から数えて11代目に当たる¹⁾。金沢叢語²⁾ならびに加能郷土辞彙³⁾には、三輪照路について以下の説明がある。

「藩の執政前田兵部の家臣三輪照路(通称小源太)は国学を善くし明治7年白山比咩神社の禰宜となり、また明治9年からは十区戸長を12年にわたり務めた。隠居して後 會曾胃癌を病みて癒えず終に明治20年9月8日50歳にして没した。病間遺命して死後その屍を金澤醫學校に送り解剖して醫學に資益せしめた。これより先 同校にて一二解剖したことはあるがそれは刑余の残軀か窮民の遺體であって、良家の人にして自ら解剖を請うたものは照路を嚆矢とした。依って學校の教官や病院の醫員等とともに醜金して碑を卯辰山墓地に建てた。」

三輪照路顕彰碑の墓碑銘

卯辰山墓地に建立されたと伝わる三輪照路顕彰碑の所在は既に不明になっているが、顕彰碑の碑文は三輪照路の主治医であった小川孜成(南疇)^{あつなり なんちゆう}が撰文しており、小川が書き残した遺稿⁴⁾によって、顕彰碑の墓碑銘を知ることができる⁵⁾。なお小川孜成の経歴については長岡博男博士の論文⁶⁾に詳しいので本稿では省略する。当時小川孜成が三輪照路に下した胃癌の診断に懐疑的な医師も相当あったが、解剖の結果小川の診断が立証され、大いに面目を施したとされている。図1に小川孜成による墓碑銘の原文(白文)、図2に「書き下し文」、図3に現代語訳「大意」を示す。

明治時代の金沢における人体解剖

金澤醫學校の初期の解剖用死体は刑死者あるいは施設の病死者であった。金沢で初めて解剖が行われたのは明治3(1870)年7月のことであり、賈金づくりの罪で斬罪に処せられた2名が金沢監獄から解剖用として金澤醫學館(藩立)に下げ渡された⁷⁾。明治3年以降明治16年10月に到る13年の間に解剖が行われた遺体は約20体に過ぎなかった。明治16年10月、金澤醫學校(縣立)に患者實驗室を設け、貧困者に薬餌を給し、その死亡する時は解剖用に供する法を定めた⁸⁾。このような貧困患者は「恤救(救療)患者」と呼ばれた。その後小野太三郎氏の尽力で小野慈善院の病死者も解剖に附されたという⁹⁾。一般人で生前に死後の解剖を申し出た第一号は、石川郡徳丸村の竹川りんで、明治16年4月に解剖された¹⁰⁾¹¹⁾。竹川りんの解剖記録はその所在

が長いあいだ不明であったが、故寺畑喜朔先生のご努力によって、全国版医学雑誌に収載されていることが明らかになった¹¹⁾¹²⁾。この医学雑誌「東京醫事新誌 第271号、明治16年」は、金沢大学医学図書館に収蔵されている。

三輪照路白山比咩神社の禰宜を務める

三輪照路が明治7年から9年にかけて白山比咩神社の禰宜を務めたとの記述²⁾³⁾を裏付ける目的で、白山比咩神社に当時の記録が残っていないかお尋ねしたところ、明治8年7月21日付けの社務日誌¹³⁾に三輪禰宜の名が認められた。「日供常ノ如シ」、すなわち「朝のお供え、参拝者への対応、当直を通じて変わりなし」と書かれており、三輪照路が白山比咩神社の禰宜を務めていたことが確認できた。

三輪照路に連なる十全同窓会会員

三輪照路について述べた文章の殆どに「良家の人にして」という、現代から見れば差別的とも取れる表現が見られるが、小川孜成の撰文が初出と考えられる。明治20年当時金澤醫學学校(石川縣甲種醫學学校)で行われた解剖は現在の病理解剖であり、医学生教育のための系統解剖が行われるのは昭和になってからである。当時解剖を受けたのは、刑死者、入院・治療費が払えない生活困窮者などに限られ、士族が解剖を受けるなど考えられない時代であった。そのような時代に、

「苟も医学に裨益有らんか、則ち死後我屍の剖視を請う」(「せめて医学に小さな功績を残したい。どうか死後私の屍を解剖して(皆に)みてほしい」)

と医学の進歩にその身を捧げた三輪照路に連なる十全同窓会会員を「三輪」姓を頼りに探したところ、お三方が浮かび上がった。

1. 小森貴先生。昭和54年卒、小森耳鼻咽喉科医院名誉院長、元石川県医師会長。
小森家の姓は「三輪」ではないが、三輪照路の長女三輪スガが小森貴先生の父方曾祖母(3代前)であり、従って三輪照路は小森先生の高祖父(4代前)に当たることが石川医報⁶⁾に述べられており、小森貴先生ご本人からも確認が得られた。三輪照路の血筋を受け継ぐ名家である。
2. 三輪晃一先生。昭和39年卒、元金沢大学医学部(旧)第2外科学教授。ご家紋が三輪照路と同じ「三本杉」であること、ご両親が三輪照路の菩提寺であった七尾市長壽寺住職と親交があったこと、菩提寺が長壽寺と同じく曹洞宗であることなどから、三輪照路に連なる名家のご出身である可能性は極めて高いと思われる。
3. 中村信一先生令夫人。十全同窓会名誉会長中村信一先生の奥さまは、ご実家が七尾城代を代々務めた三輪家の末裔であり、名家のご出身。

以上のお三方以外にも、三輪照路に連なる十全同窓会員は多いと思われます。お心当たりの方は、ぜひご教示ください。

謝 辞

「三輪小源太 先祖由緒并一類附帳」の解読に当たっては、白山比咩神社学芸員伊藤克江さま、「南疇遺稿」の解読に当たっては、かほく市文化財保護審議会委員瀬戸薫さまのお力添えを賜った。また、近世史料館職員の皆さまには多くのご教示を頂戴した。

ここに深謝申し上げる。

参考文献

- 1) 三輪小源太『先祖由緒并一類附帳』加越能文庫 史料番号16.31-065 明治3年金沢市立玉川図書館近世史料館
- 2) 和田文次郎『金沢叢語』p.中67 大正14年 加越能史談會
- 3) 日置謙『加能郷土辞彙』p.836 昭和17年 金澤文化協會
- 4) 小川孜成『南疇遺稿』p.26 明治42年 明治印刷株式会社
- 5) 多留淳文「卯辰山頂の医史跡三題 — 十全医学史断章(その3) —」金沢大学医学部十全同窓会会報 第95号p.24 平成5年
- 6) 長岡博男「郷土における解屍の沿革(3)」石川医報 第285号p.5-6 昭和36年 石川県医師会
- 7) 長岡博男「郷土における解屍の沿革(1)」石川医報 第283号 p.6-7 昭和36年 石川県医師会
- 8) 石川県『石川県史』第4編(明治編) p.608 昭和6年
- 9) 長岡博男「郷土における解屍の沿革(2)」石川医報 第284号 p.6-8 昭和36年 石川県医師会
- 10) 石林文吉『石川百年史』p.145 昭和47年 石川県公民館連合会
- 11) 寺畑喜朔「特志解剖第一号(竹川リン)の剖検記録を発見する」金沢大学医学部十全同窓会会報 第71号p.12-14 昭和59年
- 12) 寺畑喜朔「北陸の解剖略史」日本医史学雑誌第34巻第2号 p.187-201 昭和63年 <<http://jsmh.umin.jp/journal/34-2/187-201.pdf>> (アクセス確認2024年10月7日)
- 13) 寺本義弘 前白山比咩神社禰宜、私信、2020年

Juzen FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば[11]



図1. 南晴遺稿「三輪君照路墓碑銘」原文

み事を言った。「せめて医学に小さな功績を残したい。どうか死後私の屍を解剖して(善に)みてほしい」と。訃報・葬祭一切の後事については、これを手書して妻子に伝言してあった。そこで諸遺族に相談し、屍を金澤醫学校に送った。木村・山崎・浅田の三学士主事、小野軍医・大田前病院長、及び医員、開業医諸氏等、皆がここに集まった。屍を剖視すると、思った通り胃癌であった。やがて卯辰山の先祖の墓に埋葬しようとしたところ、会葬者は約百余人を数えた。観る者は皆若く力強かった(「見物人は驚くほど多かった」の意)。

夫人の清水氏は二男四女を生んだが、男は皆夭折し、長女は嫁入りしている。(そのため)次女某が家を承ぎ、今は学職(研究・教育者)となっている。その妹たちはまだ幼い。抑も病屍解剖の事は、医学にとつての益は最大である。ところが、解剖のための遺体(献体)として手に入るのは、罪人の処刑後の残骸でなければ、貧民の遺骸である。良家で自ら解剖を請う者は未だ嘗ていなかった。(この意味で君の申し出は実に初めてのことである。国学の素養なくして、どうしてこのような仁且つ勇を發揮できるだろうか(国学の素養あればこそその仁勇である)。医員の人々が、互いにお金を出し合って、碑を建ててこれを不朽に顕彰しようとならしている。私は前からこの(遺体解剖の)遺囑をうけており、その上その事を世話したので、その立場においてこの銘を誼したのである。

銘に曰く、修明皇典、淑徳家伝、
 爰有厥子、一念恪虔、
 敬神誠肅、講道風宣、
 乃長編戸、惓惓罔愆、
 乃為商估、汲々計便、
 解臟剖斷、形骸遺捐、
 垂範医学、功德無前、

図3. 南晴遺稿「三輪君照路墓碑銘」現代文(大意)

【書き下し文】

三輪君照路墓碑銘

三輪君、諱は照路、小字(は)小源太は、石川縣士族。先世は金澤藩主前田侯に仕え、二百七十石を食む。高祖勘太夫は、故有りて籍を削(ら)る。後(に)藩の大夫前田兵部収めて臣となす。考勲兵衛、諱照寛に至つて、

家老職に累遷し、八十石を食む。国学の著を以て、明倫堂に教授たり。氏は富田氏。三子有り、伯仲は皆夭す。君(は)叔にして其の後を承く。性は廉正剛直にして、苟合せず。国学を善くし、明治五年、命ぜられて宣教講義方出仕となる。七年白山比咩神社禰宜に遷り、兼ねて少講義に補せらる。九年九月加賀国第二十三区副長に転じ、十一月同国第五大区小十四区戸長に遷る。十二年職を罷り、是より家居自營す。然るに晩年善く病み、醫を累ぬるも効無し。

予また屢これに業するも、並びに奇蹟無し。謂えらく癌腫なり。胃部に鈍痛あり、触るれば硬結を知る。懊惱日に加わり、黒液を吐出す。菓食を納れず、衰徳劇増く、終に明治二十年九月八日を以て歿す、享年五十。病間予に囁みて曰く、「苟も医学に裨益有らんか、則ち死後我屍の剖視を請う」と。訃報・葬祭一切の後事はこれを手書し以て妻子に附して云えり。乃ち諸遺族に謀り、屍を金澤醫学校に送る。木村・山崎・浅田(の)三学士主事、小野軍医・大田前病院長、及び医員、開業医諸氏等皆これに会す。これを剖視するに、果たして胃癌なり。既に卯辰山の先坐に斃葬する次いで、会葬者は亡慮百余人なり、観者皆以て壮たり。配の清水氏、二男四女を生むも、男は皆夭し、長女は適人す、次女某家を承ぎ、今学職となる。餘は尚幼し。抑も病屍解剖の事は、医学に在りて其の益は尤も大なり。然るに剖視を得るは、刑餘の残軀に非ざれば、則ち窮民の遺骸なり。未だ嘗て良家にして自ら其の事を請う者は有らざるなり。君の葬は実に嗚矢たり。国学培養の素有るに非ずして、烏んぞ斯の如き仁且つ勇を能くせんや。医員の輩、相共に醜金し、碑

を建ててこれを不朽にせんことを謀る。予既にこの遺囑に接し、且つは其の事を斲旋し、乃ち当銘を誦す。

銘に曰く、皇典を修明し、家伝に淑徳す。

図2. 南晴遺稿「三輪君照路墓碑銘」読み下し文

【大意】

三輪君照路の墓碑銘

三輪君、諱は照路、幼名小源太は、石川縣士族。先祖は金澤藩主前田侯に仕え、知行二百七十石を戴いていた。高祖(祖父の祖父)勘太夫は、わけ有つて(藩臣の)籍を削られた(解雇された)。後に藩の大夫(御家老)前田兵部が取り立てて家臣にした。(父)勲兵衛、諱照寛に至つて、(前田兵部家の)家老職に出世し、知行八十石を戴いた。国学の書を著わし、明倫堂で教授を勤めた。母は富田氏で、三人の子が有つたが、長男と次男は皆早世した。(そのため)君は三男ながら其の家を嗣いだのである。(君の)性質は潔白で正直で、気が強く、安易に迎合したりしない。国学に優れ、明治五年、命ぜられて宣教講義方出仕となった。七年白山比咩神社禰宜に遷り、少講義に兼補された。九年九月加賀国第二十三区副長に転じ、十一月同国第五大区小十四区戸長となった。十二年職を

辞し、それから家で自營する(商估か)。ところが晩年度々病み、医師が色々処方を試みたが効果は無かった。私もまたしばしば投薬したが、同様に効果は得られない。(私の)見立てでは癌腫である。胃部に鈍痛があり、触れば硬結が分かる。懊惱が日に日に激しくなり、黒液を吐き出す。菓食を受け付けず、衰徳劇増く(衰弱して)、終に明治二十年九月八日に歿した。享年五十。病の間私に頼

Juzen FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば[12]

岡本京太郎

—金沢最初の近代小児科医—

加藤 英治

(昭和50年卒業)

我が国の近代小児科学は弘田長が帝国大学医科大学小児科教授に任命された明治22(1889)年12月21日を嚆矢とする。明治22年4月に第四高等中学校医学部が設置され、金沢では内科講義の一部として小児科の講義が始まった。小児科講義と診療は産科婦人科次いで内科が担当したが、大正3(1914)年2月にドイツ留学を終えた林篤(金沢医専明治37年卒業)が金沢医学専門学校に小児科学教室を開くまで小児科教授はいなかった。

岡本京太郎は、明治・大正期に活躍した金沢最初の近代小児科医で、且つ石川県小児科の最初の大立役者である。しかし、金沢大学医学部百年史には第二集第三部教官録小児科学講師の欄に在職期間の記載はなくただ岡本の姓名があるだけで、小児科同門会でも完全に忘れられた人物である。

岡本は明治5(1872)年6月の生まれで能登門前(旧櫛比村)の人である。明治20年に石川県甲種医学校に入学したが、廃校により第四高等中学校医学部に編入し、明治24年12月に同校を卒業し、明治27年6月に石川県金沢病院婦人科医員になった。

明治31(1898)年8月に岡本は藤井伊之吉(四高中医明治24年4月卒業)、金子太須計(四高医明治29年卒業)、千田榮三男(四高医明治29年卒業)と共に金沢病院を退職し彦三38番丁に金城診療院を創設した。藤井は院長で外科を、岡本は産科婦人科、金子は眼科、千田は内科を担当した。翌32年7月に病院に格上げし金城療病院と改称した。明治36年6月発行の北陸三県実況案内には小児科婦人科主任岡本京太郎とあり、8月

発行の児童研究第6巻第8号に「新生児一ヶ年の観案」と題した長女公子の観察記録が掲載され、11月の日本小児科学会入会時の所属は金沢市金城療病院小児科であったことから、此の頃に小児科を専門にしたと推測される。小児科的な臨床研究は、明治35年に「風疹ノ流行」を十全会雑誌に掲載したのが最初で、明治37年に「先天梅毒二因スル脊髓病」と「所謂『胎毒下』ノ弊害」を十全会雑誌に、明治38年に「パルロー氏假性麻痺二就テ」を児科雑誌(日本小児科学会雑誌の前身)に発表した。

明治39(1906)年5月に富山県氷見郡で奇病(尙俚病)が突如発生し社会的な大騒動になったとき、地元の医育機関である金沢医学専門学校は、村上庄太病理学教授、上田計二生理学・衛生学・細菌学教授、岡本京太郎、小原芳雄病理学講師(金沢医専明治37年卒業)、山本長助(金城療病院、金沢医専明治37年卒業)の5名を氷見郡と県境で接する羽咋郡の村落に派遣し現地調査を行った。十全会雑誌第42号に岡本が筆頭著者で「石川県羽咋郡菅池地方ニ於ケル奇病調査報告」を公表した。11月に岡本は弘田小児科学会会頭より小児科学会石川県地方幹事を嘱託され名実ともに石川県小児科医の代表になった。

明治40年8月に岡本は金城療病院を辞して金沢で最初の小児科専門医院であ

る岡本小児療院を金沢市西町の尾崎神社向いの石川薬館の跡(現金沢市尾山町6-30)に開業した。十全会雑誌編集者は「金城療病院の重鎮として創業以来絶えて一汎開業医の弊習を遂わず孜々として学に篤く懇切丁寧常に怡々として嬰兒の如かりし氏には、小児科専門を以て独立開業せられたり」と評した。

明治39年春に岡本は島田吉三郎金沢医専断学講師(四高医明治29年卒業)と結核の研究調査を行うことで一致し、島田が臨床、岡本が小児結核、八牧政孝金沢病院内科部細菌主任(四高医明治33年卒業)が細菌および医化学、小原芳雄金沢医専病理学講師が病理、中島誠金沢病院腹部内科医員(金沢医専明治37年卒業)が治療と受持分担を決め、毎月1回病理教室に集まり勉強会を始めた。次第に参加者が増え、結核だけでなく医学上の問題も研究する医事集談会に発展し、金沢商工会議所に会場を移し夜間開催になった。金沢の地は研究心に乏しく純学術的の会合がないと慨嘆する小原の意を受け、岡本は飯森益太郎(石川県甲種医学校明治20年卒業)と二人で純学術的な会を設立するために斡旋し、自然消滅状態であった明治22年創立の金沢医学会を再生させた。明治42(1909)年5月18日に新金沢医学会の発起人会および総会が開催され、高安右人金沢医学専門学校校長が会長に就任し、岡本は理事に選任



岡本京太郎講師

(写真出典：金沢医学専門学校大正元年卒業記念写真帖)

され、医学会の事務所を岡本小児療院に置いた。第1回例会は6月10日に金沢医専済々堂に於いて開催され、明治43年3月に金沢医学会会報が創刊された。

岡本の研究意欲は開業後も衰えず、小児科学会等での学会発表、児科雑誌や十全会雑誌への論文掲載が続き、また、林篤教授が小児科学教室を開講するまで、岡本小児療院は金沢で小児科医を志す医師の研修の場になった。明治41年の不破(後に蚊野)才三郎(金沢医専明治41年卒業)を初めに、村松純吉(金沢医専明治44年卒業)、竹松善松(金沢医専大正1年卒業)、兼松順次郎(京都医専大正3年卒業)、三浦勝吉(金沢医専大正5年卒業)、河瀬孝之(金沢医専大正6年卒業)、中西孚(金沢医専大正7年卒業)、中澤弘恭(金沢医専大正8年卒業)、森田克己(金沢医専大正8年卒業)と9名の医師が在籍した。

日本小児科学会は明治35年に地方集会設置を認め、同年12月に遠江地方会が発足した。明治44(1911)年6月に金沢地方会は岡本地方幹事が中心となり13番目の地方会として事務所を岡本小児療院に置いて発足した。7月30日に第1回例会を開催し、佐々木達内科第二部教授が開会挨拶をし、岡本小児療院の不破才三郎、岡本京太郎、松原三郎神経精神科教授の3名が口演発表した

明治44年9月14日に林篤は金沢医専

教授を拝命するとともに休職し、9月25日に小児科及び薬物学の研究留学のためドイツへ出発した。岡本には9月8日付で文部省より小児科学及び診断学講師嘱託の辞令が下りており、林の留学中に岡本が小児科学の講義を担当することになった。十全会雑誌編集者は岡本を講師に迎えた喜びを「林先生を送りて転た寂寥の情に堪えざる時に当り、吾等は岡本京太郎先生を迎え大いに意を強うするを得たり。先生は本校出身者中夙に学徳兼備の人として知られ、曩きに母校の爲め教養に尽され、後専ら済生の道に従われしも、常に謹厚誠直、名利を顧みず、励精研鑽以て学界に貢献せられしこと鮮しとせず、殊に吾が雑誌部講話部等の爲め常に蘊蓄の一端を披瀝し給う。後進爲めに私淑感謝措かざる所なり。今又先生繁多の身を以て吾等を育成せられんとす。吾等の幸福何物か之に加えん。是より後先生の博識と徳風に薫ぜらるる吾等は脩養努力以て校風を發揚せんことを期す。」と記した。

乳児脚気と脾疝(漢方に於ける疾患単位、ビタミンA欠乏症と後に確定)の二病態に関心をもち医化学的な研究が必要だと考えていた岡本は、林の帰国を待ち、大正3年2月に京都帝大荒木寅三郎教授の医化学教室に研究生として入り3年間研究生活を送った。

岡本が金沢に戻った大正6(1917)年

夏に竹久夢二が加賀を旅した際、9月上旬に次男不二彦が急病で岡本小児療院に入院した。岡本は金沢市医師会にも積極的に関わり、大正8年9月公布の医師会令により任意団体だった医師会が法に準拠した医師会に組織替えしなければ存続できなくなったとき、岡本は新医師会設立委員会の委員に指名された。しかし、大正9年1月に創立された新金沢市医師会の会員名簿に岡本の名はなく、大正10年12月の十全会会員名簿から岡本の氏名は削除され、金沢と縁を切ったように岡本は忽然と姿を消した。

金沢から出奔した岡本は上京し北里研究所の研究員になった。北里研究所では、麻疹予防接種試験の結果を英文で発表し、血中アドレナリンの化学的定量的研究により大正11年4月に慶応大学から学位を授与された。慶応大学医学部病理化学室田口勝太教授の研究グループにも参加し、脚気の主因がビタミンB欠乏症であることを支持する研究を行った。

多年石川県地方幹事として本会のため大いに尽瘁されたが、近頃東京市麻布区筆筒町に移転されたと岡本の消息が大正11年5月の児科雑誌に掲載された。大正13年3月に岡本は北里研究所を退所し、渋谷広尾町で岡本医院を開業した。昭和2年7月に岡本著の「家庭医学」が大日本百科全集の第2回配本として誠文堂から出版された。同年12月に報知新聞社が軽費診療を行う報知診療所を開設し、田口勝太所長の下で、岡本は開業の傍ら小児科を担当した。昭和5年には仏教主義に基づき明治44年に開院した早稲田病院の院長に就いた。病室を35室有し、5名の医員と10数名の薬剤師、看護師を擁する医療機関で、勤労者のために実費診療を行った。

東京で岡本はほぼ内科医であったが、小児科医としての矜持を持ち続けたのであろう。昭和9(1934)年8月12日に62歳で亡くなったが、昭和7年3月まで日本小児科学会会員であった。



小児科外来風景(写真出典：金沢医学専門学校大正元年卒業記念写真帖)

西日本医科学生総合体育大会

第76回西日本医科学生総合体育大会(以下西医体)は川崎医科大学の主管のもと、令和6年8月5日から8月18日の14日間にわたって岡山県で開催されました。

西医体は新型コロナウイルスの影響により、平成31年度から令和4年度までの4年間中止となっていました。令和5年度から再開され、今年は再開後二回目の開催となりました。昨年度は5年ぶりの開催で西医体の伝統や例年の雰囲気を知る人が少なかったため、運営する側も参加する側も手探り状態でしたが、今年度は以前の西医体の雰囲気や盛り上がりが見えてきたように感じました。参加した学生からは、「一年間の努力が結果し思い通りの結果が出せた」、「うまく実力を出し切れず悔しい思いをした」、「今年で最後なので悔いのないように全力で戦った」など、さまざまな感想がありました。また、一年生にとっては初めての西医体であり、「規模の大きさに圧倒された」といった感想も多くありました。

最後になりますが、西医体に向け、仲間と一生懸命練習に励んだこと、大会を通じ他大学の医学生と競い合ったり親交を深めたりしたことは、私たち学生にとってかけがえのない経験になったと感じています。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あつてのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。来年度の主管校は鹿児島大学となります。来年度の西医体に向け、どの部活もさらに努力を重ね、実力を最大限発揮できるよう邁進してまいりますので、今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

〈主な大会成績〉

【陸上部】

男子400m：窪田剛大 4位

女子走高跳：上野月咲 4位

【水泳部】

男子800m自由型：津田晃 8位

男子100mバタフライ：

上田慎之助 5位

千葉慶太郎 8位

男子200m個人メドレー：

千葉慶太郎 8位

男子4×50mフリーリレー：

小浦健士朗・坂本悠樹・上田・千葉 8位

女子50m自由形：越智萌々香 5位

女子200m個人メドレー：

越智萌々香 5位

【軟式テニス部】

女子ダブルス：

前田侑綺美・木村裕穂 ベスト16

山本桜子・石野帆乃香 ベスト16

【バドミントン部】

男子シングルス：小池一真 ベスト16

男子ダブルス：

森成亜・川尻峻幹 ベスト16

【卓球部】

男子シングルス：堅田晃史 優勝

男子ダブルス：堅田・館康太郎 準優勝

女子シングルス：永井七実 ベスト8

遠藤あゆみ ベスト16

竹尾百笑夏 ベスト16

女子ダブルス：遠藤・永井 ベスト16

【剣道部】

男子団体：優勝

女子団体：3位

男子個人：成田滉生 ベスト16

茶谷一生 ベスト16

女子個人：今泉心寧 ベスト16

(第76回西日本医科学生総合体育大会

評議委員 井村健太郎：記)



医学展2024 / 医学展in能登

医学展2024

日時 / 令和6年11月2日(土)、3日(日)

場所 / 医学類キャンパス

医学展in能登

9月15日(日) 輪島市

9月29日(日) 七尾市

12月15日(日) 珠洲市



この度は金沢大学医学展2024「紡ぐ」の開催へのご理解とご協力を賜りまして、誠にありがとうございました。本年は宝町キャンパスでの開催に加え、史上初めて「医学展in能登」を輪島・珠洲・七尾で開催しました。医学展本祭は11月2日、3日に開催され、2日は天候不良ではありましたが目標の3000名を超え3500名ほどの来場者をお迎えすることができました。また、金沢大学医学系の篤志の先生方、診療科、研究室よりご寄附をいただきまして奥能登よりチャーターバスを運行し3日の医学展に中高生や一般の

方を招待いたしました。

今年度は「紡ぐ」をメインテーマに掲げていました。能登と金沢、地域と大学、子どもたちの夢が医学展で紡がれる。多様な世代の人々が医療をキーワードに大学に集い、自分や家族の健康や将来のこと、能登のことを考え、いろいろな交流が生まれる。そのような場を創るべく、5年生を中心に準備を進めてまいりました。思い返せば、2020年に入学した私たちは入学式、縦割り横割りや新歓がない世代で、一見すれば横のつながりが薄いようにも思われる学年です。医学展は最初で最後、この学年で共に何かを創るチャンスでもありました。昨年、医学展を復活させてくださった先輩方がいたからこそ医学展の歴史が紡がれ、私たちの学年のつながりもより一層強まりました。

医学展当日はキャンパスに子どもたちや地域の方々、能登で出会い関わった方々がたくさんいらして、皆さまの笑顔が溢れていました。「楽しい!」、「貴重な体験ができて嬉しい」、「輪島から来

たよ」、「金大はじめてはいったよ」など、いろいろとお声をかけていただきました。子どもたちの楽しそうな姿、週末の息抜きに輪島から来られた家族の様子を目にするたびに胸が熱くなりました。運営にあたった多くの学生が子どもたちや地域の方々との交流を通じて人と人の関わりから紡がれる縁の大切さや温かみ、仲間と連携し苦難を乗り越えることの尊さを学ぶことができました。

この学びは4年生以下の後輩にも紡がれ、医学展の良い伝統は受け継がれていきます。私は最高の仲間とともに、金沢大学医学展の紡がれる歴史の一端になりましたことを嬉しく、誇りに思います。

医学展、医学展in能登は十全同窓会の皆さまをはじめ大学の先生方や学務の職員の方、地域の方など多くの方の温かいご支援があり開催することができました。ありがとうございました。

(医学展2024実行委員長

橋本 晃貴:記)



課外活動紹介

剣道部

金沢大学医学部剣道部では2024年度現在、総部員数は43名となっています。医学類や保健学類、その他医薬保健学域の学生にとどまらず人間社会学域や理工学域、融合学域といった金沢大学に設置されている全4学域、計12学類(総合教育理系、大学院生を含む)の学生が所属しており、長年にわたりご厚意を賜っている教士七段・林義也先生のご指導と顧問の西山正章教授のご協力の下、日々稽古に励んでいます。両先生方、並びに平素より部活動にご参加、ご協力いただいております先生方にはこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

金沢大学医学部剣道部の部訓は「春風電影」、この言葉は金沢大学の前身である四高に広まった無刀流という流派の極意「電影春風」からとったもので、その出

典は臨剣頌の中にあります。僧の祖元が元の軍の兵士に切りかかられたときに詠んだとされる句の一節で「電光影裏に春風を斬る」とあり、この時祖元は「たとえ体を斬られようともそれは稲妻が春風を斬るようなもので、自分の魂まで滅し尽くすようなことはできない」と考えたとされています。この逸話に倣い、試合の中で相手の攻撃に臆することのない泰然とした構え、そこから発生する洗練された剣術の会得を通して心身を鍛錬するとともに、剣道に打ち込むばかりで試験をおろそかにすることの無いよう試験前の勉学を理由とした出席可否の判断を学生個人に委ねています。部訓の春風電影、それから学問と武道は一体でありどちらも懸命に取り組むという文武不岐の考えから、剣道家としてだけでなく本来の武道の目的とされる人間形成のため日々研鑽を積んでいます。

当部活は例年6月に関西、7月に中部、8月に西医体、西コメ(西日本コメディカル大会)にエントリーさせていただ

ております。今年度は活動場所である小立野体育館の片面が施設の老朽化に伴う点検のため使用不可になるなど厳しい期間が続きました。この間にも他部活からの練習場所の提供や使用されていなかったトレーニング場を剣道場として開放していただき、活動日と人数を分散させて大会に向けた練習を途絶えさせないようにしてきました。こういった他課外活動団体や大学からの支援、部員からの協力の甲斐もあり、関西では男子団体3位入賞、中部では男子団体A優勝男子団体B準優勝、女子団体準優勝、西医体では男子団体優勝、女子団体3位、西コメで男子団体3位と好成績を収めることができました。

こうした日々の活動、大会での成績の背景には先述以外にも大勢の方々のご支援があるということ、我々部員一同胸に受け止め、今後もより一層邁進してまいります。

(金沢大学医学部剣道部主将
医学類3年 今永 大晟 : 記)



学生コーナー

医学部に学士編入学をして考えること

医学類4年
須磨 千草

私は高校生の時に口ヒンギヤ問題をきっかけに、難民支援の第一線で働く緒方貞子さんを知り、彼女の活動や信念を記載した東野真著『緒方貞子 難民支援の現場から』(集英社新書)という本を手にとった。幼い頃より中国の奥地や、スリランカで教育支援に携わってきた私は前著を読む中で、次第に自分自身も緒方貞子さんのように、将来は国際支援を卒業としたいと考えるようになった。その本の中で緒方さんは、将来国際協力の場で活動したいならば、まずは何よりも英語を話せるようになること、次に国際政治の知識を得ることという方針を示していた。そこで私は2018年に上智大学に入学し、外国語学部英語学科で英語と国際政治、国際協力を専攻した。さらにイギリス、フランス、シンガポール、カナダ、スウェーデン等への留学を通して、発展途上国で働くためにはもう一つ専門分野が必要であると考え、発展途上国において需要が高い医学を志すようになった。そして、私は2022年3月に上智大学を卒業し、同年4月に金沢大学医薬保健学域医学部に編入学した。

ところが前述の経歴を、日本に住む周りの人に説明しても、「つまり大学院で医学を勉強しているの?」と、あまり正確な理解を得られなかった。これは日本では、高校卒業から直接医学部に入学する事が一般的だからであろう。しかし海外の友人に同様の経歴を説明すると、わりとすんなりと受け入れられることが多い。それは海外では、大学を卒業したのちに専攻を変えて再び大学に入る人も多いことが広く知られているからである。例えばアメリカでは、一度大学を卒業してから社会人経験を経て、メディカルスクールに入学する制度を取っており、い

わばアメリカでは医学部が大学院の立ち位置となっている。

私の知人にはこんな人もいる。日本人でありながら、イタリアの医学部に通っている「えまさん」は、幼い頃より紛争地域や貧困国での援助活動に興味があり、医学を志すようになった。彼女は医療先進国であるアメリカで医学を学ぶために、15歳の時に単身でアメリカに渡り、必死に英語を勉強しながらワシントン大学在学中にイタリアの医学部を受験し、見事合格を掴み取った。現在えまさんは、今後の医学界におけるAIの活躍を見据え、ミラノ工科大学・ヒュマニタス大学というイタリアの2つの大学で、医学と医工学の2つの学士を取得するMEDTECというプログラムに参加している。医師が医学以外の分野も専門分野として学ぶことが、日本では珍しいことであっても、世界各国の医学界ではかなり一般的なのだと思われる。

金沢大学の海外臨床研究会であるKONNECTというサークルが、ハワイ大学医学部外科学教授の町淳二先生の講演会を主催した。町先生は講演会において、医学にはサイエンス面とアート面があると仰っていた。サイエンス面は知性、アート面は感性であると町先生は定義している。医学部で勉強するような身体に関する専門知識、すなわちサイエンス面はもちろん重要である。しかし前述したえまさんが推察しているように今や時代はAIと言われており、いずれは診断などもAIが担うようになり、医学界においてもAIの需要が高くなっていくことが予測される。

そこで重要となるのは町先生が主張する医学のアート面、すなわち創造性やコミュニケーションなどである。もちろん病院を訪ねてきた患者さんの病気を治し、病気にならないよう予防をするように、サイエンス面である医学知識を駆使するのは医療の目的の一つである。しかし、同じ疾患に罹患していたとしても、その人の体質、ライフステージ、人生における価値観、人生の主軸などによって治療法は変化する。従って患者さんを治療す

るための技術を持っていることを大前提とした上で、患者さん自身を理解する、すなわち真の意味で「人に出会う」ことを可能とするのは、やはりアート面が重要ではないかと私は考える。今後ますますAI技術が進歩するにしたがって、人間である医師よりもAIの方がより膨大な医学知識を持ち、より正確な診断を下すようになる時代もそう遠くはないだろう。そんな時代に医師として働くであろう私たちは、サイエンス面の医学知識も勉強しAIの不足を補いつつ、よりアート面つまり文系的な視点を兼ね備えることが求められるようになるかと私は考える。

日本では「文系」や「理系」という言葉が蔓延っている。高校では文系の大学や学部を目指すならば「文系クラス」に、医学部やその他の理系の道を志すならば「理系クラス」に所属するなど両者の区別がはっきりしており、学問が分断されてしまっている事が多い。しかし多くの分野がそうであるように、医学にも文系面と理系面が存在しており、その2つの融合が大切なのではないかと私は考える。

もっとも現在日本においては、高校卒業後、直接医学部に入学してそのまま医師になる人が大部分であるが、これを否定するものではない。確かに、高校生で生涯にわたる「医師」という職業を選択することに不安を感じるという声や、一度大学を卒業して社会に出た上で医学を志す方が、より熱意に溢れているのではという意見もある。しかし、私が3年間医学部で過ごす中で、ただ単純に試験を乗り越えるための勉強をするのではなく、些細なことであっても疑問を残さないようにと分厚い医学専門書を何冊も通読する友人や、寝る間を惜しんで勉強する友人など、実に勤勉で、高い志を持つ同級生が多く、編入生と同級生がお互いに良い刺激を与え合っていると痛感している。AIが浸透することが予見される今後を見越して医学のアート面を磨き、文系面も理系面もどちらも併せ持つ医師を育成することが求められると私は考える。

金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告(その14)

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「治すこと時々、和らげることしばしば、慰めることいつも」をメインテーマに、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」の課題を与えています。令和6年度5年生の実習は11月から始まり、今年度も多くの優れたレポートが提出されています。本稿では野田笑加さん、中谷友妃菜さん(写真)のレポートを紹介します。

超高齢化社会、多死社会、がんサバイバーの増加および高齢化、一方で病床数の減少や経済不況、世界各地での紛争が顕著になっている現代では、生老病死の苦悩があふれています。人は生まれる時も、生きる時も、死ぬ時も医療に関わります。さまざまな視点で過去と現在と未来をみつめる医学生のレポートが、現場で奮闘する医療者をも慰めてくれると感じています。

1) ひめゆり学徒隊

太平洋戦争末期の沖縄では住民を巻き込んだ壮絶な地上戦が繰り広げられた。ひめゆり学徒隊は、看護要員として動員された女学生らの通称で、教師含め240名が動員され136名が死亡した。生き延びた元学徒の方々は、長らく自身の体験を語ることはなかった。生きていくことに対し罪悪感を抱き、友人と一緒に死にたかったと思ひ苦しんだ。

戦後40年を経て、元学徒の方々は後世に沖縄戦のことを伝えねばならない、友人の生きた証を残したいと思うように



実習時の記念写真(2024年11月)

後列：佐々木、岩下、住友、安井、皆川、筆者
前列：長岡、野田、中谷、宮本

なり、1989年に沖縄県糸満市に「ひめゆり平和祈念資料館」が開館した。戦争体験を語る中で、苦しく感じることもあったが、次第に伝えることのやりがいも感じるようになったようだ。元学徒の方々が生きることにより前向きになり、体験を語ることで自身が抱えていた苦痛を多少なりとも和らげたのではないだろうか。

戦争だけでなく震災や事故などトラウマをもつ人は多くいる。この先出会う患者も、皆異なる人生を歩んでおり、死生観も十人十色である。医療者として、①患者の話に耳を傾けること、②多様な考え方を否定しないこと、③周りに流されるのではなく自分の意見も必ずもつことを心がけ、患者やチーム医療のスタッフと良好な信頼関係を築いていきたいと考える。

2) PLAN75(第95回アカデミー賞・外国語映画賞部門日本代表作品、2022年)

未来の日本を舞台とした作品である。政府は、75歳以上の高齢者が自ら命を絶つことを支援する政策「PLAN75」を施行し、超高齢化社会を食い止めようと

する。78歳のミチは、身寄りのない未亡人でホテル清掃員として働いていたが、高齢を理由に解雇されてしまう。社会の支えを失った彼女は、孤立しながらも「生きたい」という小さな願いを抱き続けるが、徐々に「自由」とされる選択肢へと追い詰められていく。経済的困難や疎外感の中で孤独を感じた人はどのように生きようとするのか、周囲の人はどのような支援ができるのかを問ひかけ、その葛藤に焦点を当てている。

PLAN75のような政策はなかったとしても、過去や現代の日本でも、上記のような葛藤を繰り返しており、医療現場はその縮図のようなところかもしれない。医療者は、患者の選択の裏にある本音や、孤独や自己否定の感情にも意識を向けなければならない。医療者の役割は、患者が生きる理由を見つけ、尊厳を持って人生を全うできるように寄り添うことであり、生と死を問う選択を安易に受け入れるのではなく、「共に生きる理由」を模索する姿勢が、真の支援として求められているのだと感じた。

「生と死」を考えるオンライン講演会2024 (第75回地域緩和ケアカンファレンス)の紹介

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

2024年11月に緩和ケアセンターと薬剤部が主催したオンライン講演会では、がん研究会有明病院精神腫瘍科の清水研先生(平成10年卒業)(写真)に自身の体験を基に「生と死」について話してもらった。清水先生には多くの著書があり、金大医学生の緩和医療実習でも取り上げられることがある。本稿では、1)清水先生の講演要旨、2)清水先生の著書を取り上げた2023年度5年生川端日向子さんのレポートを紹介しします。

1)死と向き合う患者の

こころのケア

がんは、心理学的観点からは人生そのものを脅かす病気という意味合いがある。がん罹患することで、将来の楽観的見通しを根底から覆されるような感覚を持つ人も少なくない。がん告知直後に生じる精神的苦痛は著しく、約5人に1人が抑うつ状態となり、自殺率も高いと繰り返し報告されている。

一方で、人のこころは厳しい状況と向き合う力(レジリエンス)があり、悲しみや怒りなどの負の感情が、大切な役割を果たす。また、がん罹患することによって、人生の見方が深まるような体験(=心的外傷後成長)をされる方もいる。

私が、がん専門病院で精神科医として働きだしたのは卒後6年目のことだが、赴任当時はがん患者の心理についてよく知らず、進行したがん罹患することで患者は絶望するものかと思込んでいた。しかし、多くの患者の話を聴く中で、そうではないことを知った。

「がんになってよかった」という方はいないが、「がんにならないと分からないことがあった」という方は多くいる。レジリエンス、あるいは心的外傷後成長という概念で説明されているが、死を意識することで一日一日が貴重に思えるようになり、自分はその一日をどう生きたい



講演会時の記念写真(2024年11月)
清水研先生(前列中央)と緩和ケアセンターおよび薬剤部スタッフ

かということを実際に考えるようになる。そして、生きるとはどういうことかという問いに、患者ひとりひとりが向き合い、その人なりの答えを出していく。

このようなこころの道筋をたどる患者や家族と向き合うために、医療者はどのような心構えを持たらよいだろうか。現代人の傾向として、自分や家族が病気などの体験をしていないと、死という問題と向き合うことを避ける傾向がある。私自身もがん医療の現場で働きだしたころは、死と向き合う患者にどのように関わったらよいか分からず当惑した。試行錯誤して関わり現在に至っているが、患者および家族から生きることについて多くのことを学んだという実感もある。

死は確かに多くの人にとって恐怖の対象であるが、すべての人がそれを免れないということも人生の真実である。「メントモリ」の言葉通り、死を意識することは、人生を豊かに生きるためのヒントになる。

2)もしも一年後、この世にいないとしたら(清水研、文響社)

表題の作品から、人は苦境の中をいかに生きることができると関する3つの要点を取り上げた。1)苦境にあることを自覚すること。その過程で大いなる悲

しみや怒りが生じるが、それを無理に抑さえ込まないことが大事である。人は誰しも心の可塑性(レジリエンス)を持っており、しっかり悲しむことで現実と向きあうプロセスを開始できる。

2)自身と苦境との関係を理解すること。自身がどんな人生を歩んで何を大切にしてきたか、苦境が自身の人生にどのような影響を与えているか、何に最も困っているかを把握する。3)苦境の内容に対処すること。自身がしたいことや心地よいことを指標にすることが肝要となる。その際に、本当にしたいことを望む自分とこうあるべきとの自分の対立に気づくこと、人はなぜ死を恐れるのかを理解することが大いに役立つ。

これらを踏まえて医療者が行える支援は、1)に関しては、悲しみや怒りの表出を抑えないように促し、その感情を真摯に受け止めること、2)と3)に関しては、そのプロセスを患者独りでだけ行うのは難しいため、医療者側から適切にカウンセリングを行い、患者の悩みと要望を対話形式で引き出していくことである。人は言語化する過程でその思いを整理して理解することができるため、知識を持った存在として効果的な話し合いの場を持つことは医療者の特権であり責任であると考えられる。

選択臨床実習海外派遣報告会報告記

医学類6年

長谷川あかね

令和6年9月10日、金沢大学医学類学生団体KONNECTの主催により、選択臨床実習海外報告会が実施されました。

今回の報告会では、海外での臨床実習に興味のある医学類の学生を対象に、プログラムの概要を倉知慎教授が説明された後、実際に実習に参加した学生がそれぞれの実習についての報告を行いました。対面・オンラインを合わせて50名近くもの学生が参加し、改めて海外に挑戦したいと考える医学生の多さに驚かされました。

本年度は、エストニアのタルトゥ大学、米国のハワイ大学、豪州のシドニー大学、台湾の国立台湾大学および台北医学大学を含む五つの医療機関に置いて、合わせて12人の6年生が海外実習に参加しました。そのうちの6名が、プログラムの概要や、病院での一日の様子、実習を通して

学んだこと、休日の過ごし方などに関する発表を行いました。実際に海外で実習した学生ならではの視点が多く含まれており、非常に興味深い内容ばかりでした。特に、エストニアや台湾で実習した学生は共通言語が英語でない分、言葉の壁をより感じたようですが、非言語的コミュニケーションや持ち前の勤勉さを活かして乗り越えたと伝わり、改めて医学類生のバイタリティの高さを実感しました。

また、質疑応答の時間においても多く

の学生から質問が飛び交い、とても刺激のある時間を過ごすことができました。学生同士だからこそ聞ける質問や少し踏み込んだ話ができて、よりニーズに沿った内容になったと感じています。

このような学生間の交流の機会を設けてくださった選択臨床実習海外枠担当の倉知先生をはじめ、開催のサポートをしてくださった医学学務系の皆さま、KONNECTのメンバーに深く感謝申し上げます。



第18回金沢大学ホームカミングデイ開催

令和6年11月2日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第18回ホームカミングデイを開催しました。歓迎式典には約200名、懇親交流会には約180名の同窓生等にご出席いただき、盛況な一日になりました。

歓迎式典では、最初に本学合唱団と出席者一同が校歌を斉唱しました。続いて、和田隆志学長の歓迎挨拶・本学の近況報告の後、安宅建樹金沢大学校友会会長より祝辞がありました。

現役学生の現状については、学生の留学体験報告(1名)・大学院生の研究報告(1名)・課外活動体験報告(ヨット部・1名)を実施しました。

また、本年度は新たに若手研究者および卒業生の報告時間を設けました。まず、融合研究域の藤生慎准教授から能登半島地震に関する研究報告があり、さらに、

卒業生の活躍報告として市立輪島病院長の品川誠氏(昭和58年医学部卒業)より、同病院における能登半島地震への対応について報告があり、被災地の実態に出席者はじっと聞き入っていました。

特別講演では、「地域金融行政の歩みについて」と題し、元北陸財務局長の西田直樹氏(昭和57年法文学部卒業)にご講演いただきました。

夕刻からの懇親交流会は、安宅建樹会長の乾杯の発声で始まり、本学同窓生等のクラリネットだけのオーケストラ(金沢クラリネット・クワイアー)の素晴らしい演奏をBGMに、参加者らは旧交を温めていました。さらにフィナーレには、恒例となる校歌・寮歌の斉唱が行われ、大いに盛り上がりました。

さらに、若手同窓生に向けた新たな企画として、卒業から10年・20年を経過



市立輪島病院の震災対応について報告を行う品川院長(昭和58年医学部卒業)

した方対象のランチ交流会を今年度新たに開催し、参加者は卒業後久しぶりに再開する同期との交流を楽しんでいました。

次回、第19回金沢大学ホームカミングデイは、令和7年11月1日(土)に開催が決まりました。秋の3連休を利用して、紅葉に染まる懐かしい母校にぜひお越しください。

(基金・学友支援室長 松村 典彦：記)

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。年額4,000円

①自動引き落とし(手数料本会負担)を推奨しています

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいますようお願いいたします。

②銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
(お振込の際は、ご氏名の前に**会員番号**もしくは**卒業年**のご入力をお願いいたします)
北陸銀行 小立野支店
普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

③払込用紙(手数料本会負担)

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

問合せ先

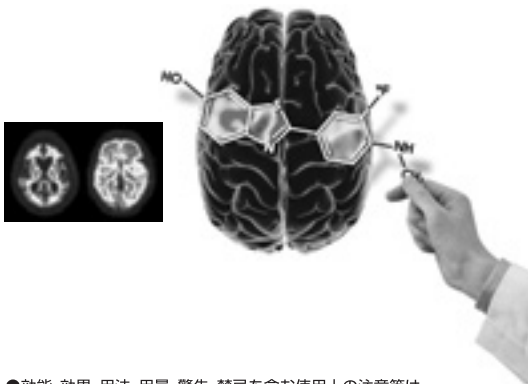
金沢大学医学部十全同窓会事務局 Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

nihon
medi+physics

放射性医薬品・脳疾患診断薬 薬価基準未収載

処方箋医薬品[※] **ビザミル® 静注**

放射性医薬品基準フルメタモル(¹⁸F)注射液
注)注意-医師等の処方箋により使用すること



●効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等は添付文書をご参照ください。

®:登録商標

資料請求先
日本メジフィジックス株式会社
〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号
製品に関するお問い合わせ先 ☎0120-07-6941

弊社ホームページの“医療関係者専用情報”サイトでPET検査について紹介しています。

<http://www.nmp.co.jp>

2024年3月作成

feel so good!

こちよい 時をおくる。

Hotel Nikko Kanazawa 306



ホテル日航金沢

石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六国口前)
Tel: 076-234-1111 Fax: 076-234-8802

会報編集委員の紹介

学内編集委員(22名)

中村 裕之
横山 茂(編集委員長)
絹谷 清剛
佐々木素子
篁 俊成
和田 隆志
太田 邦雄
杉本 直俊
谷口 巧
山本 靖彦(副編集委員長)
和田 泰三
高村 雅之
菊知 充
中田 光俊
安藤 仁
山下 太郎
岡島 正樹
稲木 紀幸
倉知 慎
林 克洋
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
蒲田 敏文
中本 安成
高村 博之
常山 幸一
古川 健治
古市 賢吾
若山 友彦
中西 清香

以上43名で構成されています。



表紙の写真

金沢の冬の風物詩「雪吊り」

雪吊りは日本海側特有の湿った雪の重みで枝が折れないようにするために行われ、この季節になると金沢市内の至る所で見かけます。病院正面でも、のとキリシマツツジの雪吊りを見ることができます。

題字：山本 健(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和7年1月23日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

十全同窓会会員の皆様、あけましておめでとうございます。令和7年の最初の会報をお届けします。今年も皆さまにとりまして幸多き一年になるよう願っております。現在、令和6年1月の能登半島地震や9月の豪雨災害に対して、本学も含め復旧、復興に向けてのさまざまな取り組みが進められています。支援活動に従事されているすべての方々に深く敬意と感謝を申し上げます。本号では前号に引き続き、被災病院からご寄稿いただいております。最前線での医療活動の実態を知ることのできる貴重なご報告と思えます。お忙しい中、本当にありがとうございます。

また、6名の先生方の教授ご就任、10名の先生方の叙勲

に対し心よりお慶び申し上げます。学会の開催、各種学術賞の受賞、教室だよりなどからも、会員の皆さまが学術的に大きく貢献している様子が伝わってきます。一方、白衣授与式、西医体報告、課外活動紹介からは、在校生の生き生きとした姿が伝わり、将来の活躍が大いに期待されます。卒業後間もない若手からベテラン世代まで、本会報を通して本学医学系や医学類の躍動、そして国内外の会員の皆さまのご活躍を知っていただけましたら幸いです。

昨年より編集委員会に加えさせていただきました。どうぞよろしく願い申し上げます。

(和田 泰三：記)